

法政大学国際日本学研究センター・国際日本学研究所
文部科学省 学術フロンティア推進事業
異文化研究としての〈日本学〉

HOSEI I.J.S. *The Newsletter*

No.9 Oct.2008.



2008年3月1日(土)～2日(日) 国際シンポジウム
「小シーボルトの業績
—日本の民族学的研究と日本研究における
コレクションの役割—」
(法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー
26F スカイホールにて)

C O N T E N T S

センター長ご挨拶	2
所長ご挨拶	3
国際シンポジウム報告	4
研究報告会	10
東アジア文化研究会報告	13
アルガスシンポジウム勉強会	22
2008年度 国際日本学研究者一覧	23
既刊案内	24

センター長ご挨拶

〔2008年4月より、国際日本学研究中心長、ならびに国際日本学研究所長が交代しました。新任のセンター長と研究所長からの挨拶を以下に掲載いたします。〕

センター長ご挨拶

星野 勉

法政大学国際日本学研究中心長 センター長



国際日本学研究中心は、本学のプログラム「日本発信の国際日本学の構築」が文部科学省21世紀COE事業に採択されたことを機縁として2002年度に設立されました。本研究センターは、このプログラムの実質的な推進母体である、国際日本学研究所、野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所、大学院国際日本学インスティテュートという四つの研究・教育機関の連携をはかりながら、21世紀COE事業全体を統括してきました。

21世紀COEプログラムは2006年度をもって終了しましたが、2007年11月に公表された事後評価においては、明確な方法論的な意識のもとでの、「国際日本学」という「新しい学問領域の創成に向けた取り組み」には強い期待が寄せられていますし、「世界のなかの能楽」、「国際沖縄学」、そして「対日本観、対中国観の変遷」などの研究成果についても高い評価が与えられています。野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所も、「国際日本学」という新しい枠組みのなかでこそ、これまでの研究実績を基礎としつつ、新しい局面を切り拓くことができたとおもわれます。また、日本とヨーロッパ、日本と中国の研究者による日本文化についての共同研究は、国際的かつ学際的な共同研究のひとつのモデルを提示しつつあるものと言ってよいと思われませんが、そう

したなかで、海外の研究者、海外の大学・研究機関とのネットワーク、外国の大使館の文化担当者とのネットワークもきわめて有効に機能しています。

非西洋国でいち早く近代化を果たし驚異的な経済的成功をおさめた日本というのとは違った観点からですが、今日海外から日本文化に熱い眼差しが向けられ、海外における大学生の日本語学習熱もいつにない高まりを見せています。また、グローバル化の時代だからこそ、国際社会で活躍するにあたっては、足もとの日本文化についての深い知識と、それを外国人に的確に発信する人材の育成が求められています。「国際日本学」という構想は、そのような時代の動向と要請を先取りするものであったとすることができます。

「国際日本学」の構築に向けての取り組みを継続しつつ、開かれた日本文化研究を担う内外の次世代研究者を育成していくことが、今後も求められていますが、国際日本学研究中心は、新しい学問領域の創成に向けた共同プロジェクトを推進するセンターとして、また、国際的な研究・教育拠点として、さらに、国際的なネットワークのセンターとして、これまで以上に重要な役割を担っていくこととなります。皆様の熱いご支援を切にお願い申し上げます。

所長ご挨拶

安孫子 信

法政大学国際日本学研究所 所長



本研究所は、文部科学省21世紀COEプログラムに本学の「日本発信の国際日本学の構築」が採択された2002年に設立されました。以来、本学既設の2研究所—野上記念能楽研究所、沖縄文化研究所—と連携し、国際日本学研究センターの統括の下、21世紀COEプログラム事業を精力的に推進してきました。同プログラムが終了した2007年からは、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア部門）プログラムに「異文化研究としての日本学」が採択されたのを受け、やはり2研究所と結んで、国際日本学の引き継ぎの構築に取り組んでいます。

「日本学」そのものは外国産です。ある言語圏で、日本の何らかの文化現象を対象に行われている学問研究が、その言語圏で、まとめて「日本学」の名で呼ばれています。そこには文学、哲学、社会学、政治学、人類学といった人間諸科学の多様な観点、共存しているのが普通です。「日本学」はもともと、それぞれの地域で、学際的に開かれた存在なのです。そこで、このような各所での「日本学」を結びつけ、それらにさらに国際的性格を付与することで、「日本学」総体に新たなダイナミックな展開をもたらすことを目指して、法政大学の提唱の下に立ち上げられたのが「国際日本学」です。

「国際日本学」はこうして、日本文化をフィールドとする、

学際的であると同時に国際的な、きわめて意欲的な学問研究の試みと言えます。これによって、日本における日本研究の諸成果が、より多量により直接的に、外に発信されていきます。それは各所で「日本学」を活性化させるとともに、日本文化への新たな関心を喚起していきます。

「国際日本学」はまたとくにこの日本において重要な存在です。日本には、日本についての文学研究、歴史研究などはあっても、「日本学」はありませんでした。そしてまた、日本における日本研究は、国文学、国史学といった仕方となく内に籠る傾向にありました。「国際日本学」は、そのような日本における日本研究を、学際的かつ国際的に開いていきます。このように二重に開くことで、「国際日本学」は、グローバル化が進行する現世界下における、日本文化の特殊性と普遍性を見直しおよび再発見に、われわれを導いていきます。

現在、本研究所では、国際シンポジウム、研究集会などを通じて、内外の研究者とともに、以上の「国際日本学」の研究活動を展開しています。その研究成果は、機関誌『国際日本学』を始めとする各種の出版物を通じて公開されています。また、研究活動のインフラと言うべき、内外の研究機関・研究者との交流・連携のネットワークの形成にも力を注いでいます。

「小シーボルトの業績

—日本の民族学的研究と日本研究におけるコレクションの役割—

ヨーゼフ・クライナー 他

(法政大学特任教授)

● 日 時：2008年3月1日（土）、2日（日）

● 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26F スカイホール

本国際シンポジウムは、オーストリア大使館、ドイツ連邦共和国大使館の後援を得て、ハインリッヒ・フォン・シーボルト（Heinrich von Siebold, 1852-1908、通称：小シーボルト）の没後100年を記念して開催された。その企画には「私立大学学術研究高度化推進事業（学術フロンティア部門）」の事業推進担当の一人であるヨーゼフ・クライナー本学特任教授が当たられた。

江戸後期にオランダ商館付医師として来日したフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1886）は、長崎郊外に開設した鳴滝塾で多くの優れた蘭学者を育成したばかりか、帰国後、大著『日本』、『日本動物誌』、『日本植物誌』を著し、日本をヨーロッパに紹介したドイツ人として著名である。この大シーボルトの次男、ハインリッヒ・フォン・シーボルトは、1869年に16歳で来日し、その後約30年間、東京のオーストリア＝ハンガリー帝国公使館に通訳官や書記官として勤務しながら、父シーボルトの日本研究を継承、発展するべく、一方で、大森貝塚の発掘や北海道沙流地方のアイヌ調査等を基礎とする考古学的・民族学的研究を、他方で、近世日本の文化・生活様式を理解するための蒐集活動を展開した。

本シンポジウムの目的は二つある。一つは、小シーボルトによる考古学的・民族学的研究業績を再点検することであり、さらに、民族学的な日本研究のドイツ語圏を中心とするヨーロッパでのその後の展開を追うことである。もう一つは、現在ウィーン国立民族学博物館・工芸美術館に所蔵されている、小シーボルトの膨大な日本関係コレクションの意義を考察すると同時に、このようなコレクションの日本研究にとっての意味を問うことである。このことは、また、文献研究を中心とする日本学、社会科学的地域研究としての日本研究に代わる、新しいタイプの日本研究のあり方を提起することでもある。

初日、第一部「小シーボルトの生涯と業績」では、父のシーボルトに比べて知名度の低い小シーボルトの「生涯と業績」（ヨーゼフ・クライナー本学特任教授）、シーボルト家の末裔ブランデンシュタイン家に残された資料を手掛かりとする「小シーボルトの日本における活動」（宮坂正英長崎純心大学教授）、さらに、小シーボルトが「日本考古学の黎明期」（小倉淳一本学文学部専任講師）において果たした役割とその今日的評価が報告された。

第二部「日本の民族学的研究—小シーボルト以後—」では、小シーボルトによる日本民族・文化の「多元的（＝複合的）」起源論の評価と「小シーボルト以後の日本民族学・文化人類学の展開」（クライナー本学特任教授）、1930年代のウィーン大学において、文化史的民族学や柳田国男、折口信夫の民俗学の影響下に、岡正雄、A・スラヴィクによっ

て民族学的日本研究の基礎が据えられた経緯（住谷一彦立教大学名誉教授「ウィーンにおける日本の民族学的研究—岡正雄とA.スラヴィク—」）、さらに、ウィーン大学に始まる民族学的日本研究が今日ではドイツ語圏の日本研究の中核を担っていること（ハンス・ディッター・エルシュレガー・ボン大学準教授「ドイツ語圏における日本の文化と社会についての民族学的研究」）が報告された。また、民族学と文化人類学における新しい展開にルロア＝グーランの日本文化体験が関与していること（ジョセフ・キブルツ・フランス国立科学研究センター教授「ルロア＝グーランと日本文化」）、ビジュアルな資料分析を可能にする画像のデジタル化によって日本研究にも「ビジュアル・ターン」と呼ぶべき新しい展開が始まっていること（セップ・リンハルト・ウィーン大学教授「西洋の日本研究におけるビジュアル・ターン」）が報告された。

二日目、第三部「日本研究と日本コレクション」では、オーストリア工芸美術館所蔵の小シーボルト・コレクションの位置づけの歴史の変遷を辿りながら、コレクションの意義を問う「小シーボルトの工芸美術コレクション」（ヨハネス・ヴィーニンガー・オーストリア工芸美術館東洋部長）、「米国ピーボディー・エセックス博物館所蔵のモース・コレクションから見るペリー以前・以後の日米異文化交流」（小林淳一東京都美術館副館長）、アイヌ関係コレクションの民族学的意義を問う「ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクション—その民族学的意義と西洋のアイヌ観への影響」（エルシュレガー・ボン大学準教授）、「江戸モノづくり」研究における「コレクションの役割」（鈴木一義国立博物館研究主幹）、江戸後期に蓄積されたいくつかのコレクションの特徴と日本の科学・技術史におけるその位置づけを検討する「江戸期の日本におけるコレクションについて」（ヴォルフガング・ミヒエル九州大学大学院教授）、「子爵澁澤敬三のアチック・ミュージアム」（近藤雅樹国立民族学博物館教授）、ベルリン国立民族学博物館所蔵の琉球王朝時代の染色コレクションの調査研究を通じて失われた技術の復元に成功した経緯からコレクションの意義を説く「ベルリン国立民族学博物館所蔵の琉球王朝時代の染色コレクションの意義」（祝嶺恭子沖縄県立芸術大学名誉教授）、ヨーロッパに渡った能・狂言面の研究・調査報告からなる「在欧能・狂言面の研究」（西野春雄本学能楽研究所所長）の合計8本の研究発表がなされた。

以上のように、本シンポジウムは、一方で、小シーボルトの学問的業績の再評価を迫ると同時に、彼の投げ掛けた問題を真摯に受け止めることを私たちに提起するものであった。他方で、文化交流における美術工芸品などのモノの果たす役割に目を向けさせ、日本文化研究にとってのコレ

クションの果たす意義や役割を改めて問い、今後の日本研究や国際日本学のあり方を考えさせるものであった。

また、現在ベルリン国立民族学博物館に所蔵されている、1884年（明治17年）ドイツ政府によって購入された琉球王朝文化コレクションにある琉球衣装を復元した作品2点（絹浅地花織袴衣装、絹紺地手縞袴衣装）を、祝嶺恭子沖縄県立芸術大学名誉教授のご好意で会場の一角に展示することができたが、ベルリン国立民族学博物館所蔵の琉球王朝時代の染色コレクションの調査研究を通じて、消滅していた技術と琉球衣装の復元に成功したというお話は実に感銘深いものであった。かつての日本の文化や生活様式をうかがわせるモノ（＝工芸美術品）が、日本ではなく海外の博物館にコレクションとして保存されているというのは、それはそれで有り難いことではあるが、なんととも奇妙なことである。

なお、初日はドイツ連邦共和国、二日目はオーストリアという小シーボルトになじみのある両国から駐日大使をお迎えしてのシンポジウムであったが、両日とも100名を超える参加者があり、目から鱗が落ちる体験をしたのは私ひとりではなかったはずである。

〔記事執筆：星野 勉
（法政大学国際日本学研究所 前所長）〕



シンポジウム会場



ヨーゼフ・クライナー氏



展示の様子①



展示の様子②



ハンス＝ヨアヒム・デア駐日ドイツ連邦共和国大使（中央手前）



ユッタ・シュテファン＝バストル駐日オーストリア大使

当日プログラム

2008年3月1日(土) 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー26階 スカイホール

10:00~10:10 開会/挨拶(法政大学国際日本学研究所所長 星野 勉)
Opening (Hoshino Tsutomu Prof., Director Inst. of International Japan Studies, Hōsei Univ., Tokyo)

第1部 小シーボルトの生涯と業績 (司会:小林淳一)

10:10~10:40	小シーボルトの生涯と業績 Henry von Siebold's Life and Scholarly Achievements	ヨーゼフ・クライナー(法政大学特任教授) Josef Kreiner Spec. Prof., Hōsei Univ., Tokyo
10:40~11:20	ブランデンシュタイン家文書にみられる ハインリッヒ・フォン・シーボルトの日本における活動について The Activities of Heinrich von Siebold in Japan as documented in the Papers found in the Brandenstein Archive	宮坂 正英(長崎純心大学人文学部教授) Miyasaka Masahide Prof., Nagasaki Junshin Univ.
11:20~12:00	ハインリッヒ・フォン・シーボルトと日本考古学の黎明期 Heinrich Philipp von Siebold and the Dawn of Japanese Archaeology	小倉 淳一(法政大学文学部専任講師) Ogura Jun'ichi Senior Lecturer, Hōsei Univ., Tokyo
12:00~13:00	お昼休み Lunch Time	

第2部 日本の民族学的研究 —小シーボルト以後— (司会:ヴォルフガング・ミヒェル)

13:00~13:40	小シーボルト以後の日本民族学・文化人類学の展開 The Development of Ethnological Studies in Japan after Henry von Siebold	ヨーゼフ・クライナー(法政大学特任教授) Josef Kreiner Spec. Prof., Hōsei Univ., Tokyo
13:40~14:20	ウィーンにおける日本の民族学的研究 —岡正雄とA.スラヴィク— Japanese Ethnological Study in Austria —Oka Masao and Alexander Slavik	住谷 一彦(立教大学名誉教授) Sumiyama Kazuhiko Prof. emer., Rikkyō Univ., Tokyo
14:20~15:00	一人の文化人類学者が日本を見つめている —ドイツ語圏における日本の文化と社会についての民族学的研究— The Cultural Anthropologist looks at Japan: Ethnological Research on Japanese Culture and Society in the German-speaking Academic World	ハンス・ディーター・オイルシュレガー(ボン大学准教授) Hans Dieter Ölschleger Senior Lecturer, Univ. of Bonn
15:00~15:30	コーヒーブレイク Coffee break	
15:30~16:10	ルロア・グーランと日本文化 André Leroi-Gourhan and Japan	ジョセフ・キブルツ(フランス国立科学研究センター教授) Josef Kyburz Prof., C.N.R.S., Paris
16:10~16:50	西洋の日本研究におけるビジュアル回転 The Visual Turn in Japanese Studies in the West	セップ・リンハルト(ウィーン大学東アジア研究センター所長、ウィーン大学教授) Sepp Linhart Professor and Director, Institute for East Asian Studies, Univ. of Vienna
16:50~17:30	討論・閉会 Discussion and Closing Remarks	

2008年3月2日(日) 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー26階 スカイホール

10:00~10:30 開会/挨拶(法政大学特任教授 ヨーゼフ・クライナー)
Opening (Josef Kreiner Spec. Prof., Hōsei Univ., Tokyo)

第3部 日本研究と日本コレクション (司会:ジョセフ・キブルツ、宮坂正英、ヨーゼフ・クライナー)

10:40~11:10	小シーボルトの工芸美術コレクションの ヨーロッパの美術史におよぼした影響 The Lives of a Collection: Origin, History and Future of the Heinrich von Siebold Collection	ヨハネス・ウィーニング(オーストリア工芸美術館東洋部長) Johannes Wieninger Curator of the East Asian Art Dep: MAK - Vienna
11:10~11:40	米国ピーボディ・エッセックス博物館所蔵のモースコレクション から見るペリー以前の日米異文化交流 The Dawn of Japanese and American Cultural Exchange: from the Morse Collection at the Peabody Essex Museum, Salem, Massachusetts.	小林 淳一(東京都美術館副館長) Kobayashi Jun'ichi Vice-Director, Tokyo Metropolitan Museum of Art
11:40~12:40	お昼休み Lunch Time	
12:40~13:10	ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクション: その民族学的意義と西洋のアイヌ観への影響 Ainu Collections in European Museums: Their Importance for Ethnology and their Impact on the Image of the Ainu in the West	ハンス・ディーター・オイルシュレガー(ボン大学准教授) Hans Dieter Ölschleger Senior Lecturer, Univ. of Bonn
13:10~13:40	江戸モノづくりにおけるコレクションの役割 The Role of Collections in "Inventions in the Edo period"	鈴木 一義(国立科学博物館理工学研究所 科学技術グループ 研究主幹) Suzuki Kazuyoshi Sen. Researcher, National Museum of Nature and Science, Tokyo
13:40~14:10	江戸期の日本におけるコレクションについて Collections in Edo Period Japan	ヴォルフガング・ミヒェル(九州大学大学院言語文化研究センター教授) Wolfgang Michel Prof., Faculty of Languages and Cultures, Kyushu Univ.
14:10~14:40	コーヒーブレイク Coffee break	
14:40~15:10	子爵滋澤敬三のアチック・ミュージアム The Attic Museum established by Viscount Shibusawa Keizō	近藤 雅樹(人間文化研究機構 国立民族学博物館 民族文化研究部 教授) Kondo Masaki Prof., National Museum of Ethnology, Osaka
15:10~15:40	ベルリン国立民族学博物館所蔵の 琉球王朝時代の染織コレクションの意義 The Significance of the Ryukyuan Textile Collection of the Berlin National Museum of Ethnology	祝嶺 恭子(沖縄県立芸術大学名誉教授) Shukumine Kyōko Prof. emer., Okinawa Pref. Univ. of Art
15:40~16:10	在欧能・狂言面の研究 A Study of Nō and Kyōgen Masks in Europe	西野 春雄(村上記念法政大学能楽研究所所長、法政大学文学部教授) Nishino Haruo Prof., Director Nagami Memorial Inst. of Nōgaku Studies Hōsei Univ., Tokyo
16:10~16:30	閉会(法政大学特任教授 ヨーゼフ・クライナー) Closing Remarks	Josef Kreiner Spec. Prof., Hōsei Univ., Tokyo

International Symposium The Achievements of Siebold the Younger: Studies of Japanese Ethnology and the Role of His Collection in Japanese Studies

March 1-2, 2008; Ichigaya Campus, Hosei University

Philipp Franz Balthasar von Siebold (1796-1886) arrived in Japan in the late Edo period to work as a medical doctor at the Dutch trading house at Nagasaki. He not only educated many excellent Japanese students of Western learning at the Dutch School, Narutaki-Juku, but was also an eminent scholar himself, who authored several books on Japan, including *Nippon*, *Fauna Japonica* and *Flora Japonica*.

His second son, Heinrich von Siebold (Siebold the Younger, 1852-1908) came to Japan in 1869, when he was sixteen years old. For nearly thirty years, he continued and developed his father's work on Japanese studies whilst working as a translator and officer of the Embassy of the Austro-Hungarian Empire in Japan. In particular, he contributed to archeological and ethno-

logical studies, such as the excavation of the Ōmori shell mounds and research on Ainu people in the Saru region of Hokkaido. At the same time, he was a collector of Japanese arts and crafts.

This symposium had two objectives. One was to revisit the achievements of Heinrich von Siebold, who is studied less than his father Philipp, and the subsequent development of Japanese Studies in Europe, especially in the German-speaking areas. Topics discussed included his activities in Japan, his studies on ethnological diversity, and his influence on academics in the fields of Japanese ethnology and anthropology both in Japan and in Europe. The other aim was to consider the significance of Heinrich's Japanese collection, which is now held at the Museum für Völkerkunde and Museum für Angewandte Kunst, both of Vienna.

The symposium, which welcomed the Ambassadors of Germany and Austria and over one hundred participants, revealed the significance of Heinrich's work and the importance of objects such as arts and crafts in international cultural exchange.

文部科学省平成 19 年度私立大学学术研究高度化推进事业“学术开拓推进事业”

菲利普·冯·西伯鲁特逝世 100 周年国际研讨会
“小西伯鲁特的业绩——站在民族学的角度研究日本和以日本研究为主题的收藏品的作用”

时间 2008 年 3 月 1 日 10:00~17:00

会址 法政大学市谷校区鲍尔索那德塔教学楼 26 层 斯卡伊厅

本次国际研讨会旨在纪念Heinrich von Siebold (1852-1908, 通称小Siebold) 先生逝世 100 周年。会议得到了奥地利大使馆, 德联邦共和国大使馆的大力支持。负责推进这项“私立大学学术研究高度化推进事业(学术新开拓部门)”计划的责任者之一的瑶哲夫·库拉那是本校特任教授。

江户后期作为荷兰商馆副医师来日的菲利普·冯·西伯鲁特(Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1886), 不仅在长崎郊外开设的鸣滝塾培养了一大批优秀的兰学者, 归国后, 还撰写了《日本》、《日本动物志》、《日本植物志》这样的传世名作, 作为把日本介绍到欧洲的德国人而闻名。这位西伯鲁特的次子——海因里希·冯·西伯鲁特, 1869 年 16 岁时来日, 之后的约 30 年里在东京的奥地利=匈牙利帝国公使馆作翻译官, 书记官, 同时为了继承和发展其父对日本的研究, 小西伯鲁特以大森贝冢发掘工作、北海道沙流地方的阿依奴调查等为基础进行了考古学、民族学方面的研究, 同时, 展开了以理解近代日本文化、生活样式为目的的收集活动。

本次研讨会的目的有两个。其一, 对小西伯鲁特在考古学、民族学上的研究业绩进行再次讨论研究, 在此基础上, 进一步

了解在以民族学角度研究日本的德语圈为中心的欧洲在此后的发展。其二, 探讨现在维也纳博物馆·工艺美术馆所藏的, 庞大的小西伯鲁特收藏品的意义的同时, 发掘这样的收藏品的价值。另外, 对于以文献研究为主的日本学, 以及作为社会科学学科下的地域研究领域的日本研究而言, 这是一种新类型的日本研究方法。

讨论会第一天, 在第一部分“小西伯鲁特的生涯和业绩”中, 介绍了与父亲西伯鲁特相比知名度较小的小西伯鲁特的“生涯和业绩”(瑶哲夫·库拉伊那本校特任教授)。其中包括, 从西伯鲁特家族的布拉格塔因分支流传下来的资料中得知的“小西伯鲁特在日本的活动”(宫坂正英长崎纯心大学教授), 然后报告了小西伯鲁特在“日本考古学的黎明期”(小仓淳一本校文学部专任讲师)的作用和对其在今天的评价。

在第二部分“从民族学角度对日本进行的研究——小西伯鲁特以后——”中, 报告了对源自小西伯鲁特的日本民族·文化的“多元式的(=复合式的)”起源论的评价和“小西伯鲁特以后的日本民族学·文化人类学的发展”(库拉伊那本校特任教授)。还报告了在 30 年代的维也纳大学, 冈正雄、A·斯拉维果受文化史民族学以及柳田国男、折扣信夫的民俗学的影响, 建立民族学日本研究的基础的过程(住谷一彦立教大学名誉教授“在维也纳进行日本的民族学上的研究——冈正雄和A·斯拉维果——”)。接着, 报告了始于维也纳大学的民族学角度的日本研究, 其在现在担当着德语圈日本研究的中枢(汉斯·迪它·艾卢修来格·彭大学准教授“在德语圈关于日本文化和社会的民族学研究”)。另外, 还报告了在民族学和文化人类学领域卢牢阿=古兰的日本文化的体验(约瑟夫·科布鲁茨·法国国立科学研究中心教授“卢牢阿=古兰和日本文化”)。以及通过对画像的数码化处理使视觉资料的分析成为可能, 因此, 日本研究也进入了“向可视化转变”的新局面(瑟夫·林哈鲁特·维也纳大学教授“关于西洋日本研究的可视化转变”)。

第二天, 在第三部分“日本研究和与此相关的收藏品”上, 与会者追溯了奥地利工艺美术馆所藏的小西伯鲁特收藏品地位

의历史变迁, 同时发表了 8 项研究。它们包括, 讨论收藏品意义的“小西伯鲁特的工艺美术收藏”(瑶哈纳斯·维宁格·奥地利工艺美术馆东洋部长)。“从美国皮博迪·埃塞克斯博物馆所藏的最高收藏品中来看贝利以前以后的日美异文化交流”(小林淳一东京都美术馆副馆长)。讨论阿依奴相关收藏的民族学意义的“欧洲阿依奴相关收藏的民族学意义和对西洋的阿依奴观的影响”(艾卢修来格·彭大学准教授)。在“江户制造业”研究中“收藏品的作用”(铃木一义国立博物馆研究主干)。讨论江户后期形成的几处收藏的特征和其在日本科学·技术史上的地位的“江户期日本的收藏”(沃卢夫冈谷·米黑卢九州大学大学院教授)。“子爵涩泽敬三的阿其谷·缪泽阿姆”教授(近藤雅树国立民族学博物馆教授), 通过对柏林国立民族学博物馆所藏的琉球王朝时代的染色收藏的调查研究, 使曾经消失的技术得以复原成功, 通过这一事件来阐明收藏品的意义的“柏林国立民族学博物馆所藏的琉球王朝时代的染色收藏的意义”(祝岭恭子冲绳县立艺术大学名誉教授)。在对渡欧能·狂言的研究·调查报告中形成的“在欧能·狂言面的研究”(西野春雄本校能乐研究所所长)。

综上所述, 本次研讨会对小西伯鲁特的学术业绩进行了再评价, 并且与以往相比更加注重他所提示的课题。同时, 将目光转向为文化交流而收藏的美术工艺品在研究中的作用, 探讨日本文化研究中收藏品的意义。

又, 现在收藏于柏林国立民族学博物馆的, 根据 1884 年(明治 17 年)德国政府购入的琉球王朝文化收藏中的两件复原了的琉球衣装(绢浅地花织合衣装, 绢绀地手缣和衣装), 承祝岭恭子冲绳县立艺术大学名誉教授的美意得以在会场做了展示。通过对柏林国立民族学博物馆所藏的琉球王朝时代的染色收藏的调查研究, 使失传的技术和琉球衣装得以复原这样的事例让在场的每一个人感触良深。蕴含深厚日本文化, 展现当时生活风貌的物品(=工艺美术品), 不是在日本而是在海外的博物馆作为收藏被流传下来, 这真的非常难得, 非常奇妙。

本次会议出席者众多, 并且很荣幸地邀请到了德联邦共和国和奥地利这两个与小西伯鲁特有着密切关系的国家的驻日大使。会议充实深刻的内容, 使与会者获益匪浅。

[记事执笔: 星野 勉(法政大学国际日本学研究所前所长)]

국제 심포지움 보고

「小시볼트의 업적-일본 민족학적 연구와 일본 연구에 있어서의 콜렉션의 역할-」

요세프·크라이너 외

(호세이 대학(法政大学) 특임교수)

●일시: 2008년 3월 1일(토), 2일(일)

●장소: 호세이 대학(法政大学) 이치가야 캠퍼스
보아소나드 26층 스카이 홀

본 국제 심포지움은 오스트리아 대사관, 독일 연방 공화국 대사관의 후원으로, 하인리히·폰·시볼트(Heinrich von Siebold, 1852-1908, 통칭: 小시볼트) 사후 100년을 기념하기 위하여 개최되었다. 금번 기획은 「사립 대학 학술 연구 고도화 추진 사업(학술 프론티어 부문)」의 사업 추진 담당자의 한 사람인 요세프·크라이너 호세이 대학 특임 교수가 담당했다.

에도(江戸) 후기에 네덜란드 상관(商館) 소속 의사로 일본에 온 필립·프란츠·폰·시볼트(Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796-1886)는, 나가사키(長崎) 교외에 개설된 나루타키 쥬크(鳴滝塾)에서 우수한 난학자(蘭学者)들을 다수 육성했을 뿐 아니라, 귀국 후 대작 『일본』, 『일본 동물지』, 『일본 식물지』를 저술하였으며, 일본을 유럽에 소개한 독일인으로 저명하다. 필립·프란츠·폰·시볼트의 차남인 하인리히·폰·시볼트는, 1869년에 16세의 나이로 독일하여, 그 후 약 30년간 도쿄에 있는 오스트리아=헝가리제국 공사관에서 통역관과 서기관으로 근무하면서, 부친 시볼트의 일본 연구를 계승, 발전시키기 위해, 한편으로는 오모리 패총(大森貝塚)의 발굴과 홋카이도(北海道) 사루(沙流)지방의 아이누 조사 등을 기초로 한 고고학적·민족학적 연구를, 다른 한편으로는 근세 일본의 문화와 생활 양식을 이해하기 위한 수집 활동

을 전개했다.

본 심포지움에는 두 가지 목적이 있다. 그 첫째는 小시볼트에 의한 고고학적·민족학적 연구 업적을 재검토하고, 나아가 독일어권을 중심으로 한 유럽에 있어서 그 후의 민족학적 일본 연구의 전개를 추적하는 것이다. 다른 하나는, 현재 빈 국립 민족학 박물관·공예 미술관에 소장되어 있는 小시볼트의 막대한 일본 관계 콜렉션의 의의를 고찰함과 동시에, 이러한 콜렉션이 지닌 일본 연구에 있어서의 의미를 규명하는 것이다. 이는 또한 문헌 연구를 중심으로 하는 일본학, 사회 과학적 지역 연구로서의 일본 연구에 대신하는 새로운 형태의 일본 연구 방법을 제기하는 것이기도 하다.

제 1일, 제 1부 「小시볼트의 생애와 업적」에서는 부친 시볼트에 비해 지명도가 낮은 小시볼트의 「생애와 업적」(요세프·크라이너, 호세이 대학 특임 교수), 시볼트가의 후에 브란덴슈타인가에 남겨진 자료를 단서로 하는 「小시볼트의 일본 활동」(미야사카 마사히데(宮坂正英), 나가사키 쥬신대학(長崎純心大学) 교수), 그리고, 小시볼트가 「일본 고고학의 여명기」(오구라 준이치(小倉淳一), 호세이 대학 문학부 전임 강사)에 담당했던 역할과 오늘날의 평가에 대한 보고가 있었다.

제 2부 「일본의 민족학적 연구-小시볼트 이후-」에서는 小시볼트에 의한 일본 민족·문화의 「다원적(=복합적)」기원론의 평가와 「小시볼트 이후의 일본 민족학·문화 인류학의 전개」(크라이너, 호세이 대학 특임 교수), 30년대 빈 대학에서 문화사적 민족학과 야나기타 구니오(柳田国男), 오리구치 시노부(折口信夫)의 민족학의 영향으로 오카 마사오(岡正雄), A·슬라빅에 의해서 민족학적 일본 연구의 기초가 자리잡게 된 경위(스미야 가즈히코(住谷一彦), 릿쿄대학(立教大学) 명예 교수 「빈에 있어서의 일본 민족학적 연구-오카 마사오와 A·슬라빅-」), 그 외에 빈 대학에서 시작된 민족학적 일본 연구가 오늘 날에는 독일어권 일본 연구의 중추를 담당하고 있는 점(한스·디터·엘슬레거, 본 대학 준교수 「독일어권에 있어서의 일본 문화와

사회에 관한 민족학적 연구)이 보고되었다. 또한, 민족학과 문화 인류학의 새로운 전개에 르로아=구란의 일본 문화 체험이 관여하고 있는 점 (조셉·키브르츠, 프랑스 국립 과학 연구 센터 교수 「르로아=구란과 일본 문화」), 비주얼 자료 분석을 가능케 하는 화상의 디지털화에 의해 일본 연구에도 「비주얼·턴」이라 불릴만한 새로운 전개가 시작된 점 (셴·린하르트, 빈 대학 교수 「서양의 일본 연구에 있어서의 비주얼·턴」)이 보고되었다.

제 2 일, 제 3 부 「일본 연구와 일본 컬렉션」에서는, 오스트리아 공예 미술관이 소장하고 있는小提示볼트·컬렉션의 자리매김에 관한 역사적 변천을 더듬으며 컬렉션의 의의를 묻는 「小提示볼트 공예 미술 컬렉션」(요하네스·비닝거, 오스트리아 공예 미술관 동양부장), 「미국 피바디·에섹스 박물관 (Peabody Essex Museum—翻譯者) 소장의 모스·컬렉션으로 보는 페리 이전·이후의 일미 이문화 교류」(고바야시 준이치 (小林淳一), 도쿄도 미술관 부관장), 아이누 관계 컬렉션의 민족학적 의의를 묻는 「유럽에 있어서의 아이누 관계 컬렉션—그 민족학적 의의와 서양의 아이누관에 미친 영향」(엘슬레저, 본 대학 준교수), 「에도의 제품 제작」연구에 있어서의 「컬렉션의 역할」(스즈키 가즈요시 (鈴木一義), 국립 박물관 연구 주간), 에도 후기에 축적된 몇몇 컬렉션의 특징과 일본의 과학·기술사에 있어서의 위치를 검토하는 「에도기 일본의 컬렉션에 관하여」(볼프강·미헬, 큐슈 대학 (九州大学) 대학원 교수), 「자작 (子爵) 시부사와 케이조 (澁澤敬三)의 아티크·뮤지엄」(콘도 마사키 (近藤雅樹), 국립 민족학 박물관 교수), 베를린 국립 민족학 박물관이 소장한 류큐 왕조(琉球王朝) 시대 염색 컬렉션의 조사 연구를 통해서, 잃어 버린 기술의 복원에 성공한 경위를 근거로, 컬렉션의 의의를 설명하는 「베를린 국립 민족학 박물관 소장 류큐 왕조 시대 염색 컬렉션의 의의」(슈쿠미네 료코 (祝嶺恭子), 오키나와현립 예술 대학 명예 교수), 유럽에 건너간 노(能)·쿄겐(狂言) 가면의 연구·조사 보고로 이루어진 「유럽에 소재한

노·쿄겐 가면의 연구」(니시노 하루오 (西野春雄) 호세이 대학 노가쿠(能楽) 연구소 소장) 등 총 8 편의 연구 발표가 있었다.

이상에서 보았듯이, 본 심포지움은 한편으로는小提示볼트의 학문적 업적에 대한 재평가를 촉구함과 동시에, 우리에게 그가 제시한 문제를 진지하게 받아들일 것을 제기하는 계기가 되었다. 반면, 문화 교류에 있어서 미술 공예품 등이 차지하는 역할에 관심을 갖게 하고, 일본 문화 연구에 있어서의 컬렉션의 의의와 역할을 새삼 거론하여, 금후의 일본 연구와 국제 일본학의 양상을 생각하게 하는 계기가 되었다.

또한, 1884년(明治 17년) 독일 정부가 구입하여, 현재 베를린 국립 민족학 박물관에 소장되어 있는, 류큐 왕조 문화 컬렉션 중, 류큐 의상을 복원한 작품 2점(絹淺地花織袴衣装, 絹紺地手縞袴衣装)을, 슈쿠미네 료코 오키나와현립 예술 대학 명예 교수의 배려로 회의장 일각에 전시할 수 있었는데, 베를린 국립 민족학 박물관이 소장한, 류큐 왕조 시대의 염색 컬렉션 조사 연구를 통해, 소멸된 기술과 류큐 의상의 복원에 성공했다는 보고는 대단히 감명 깊었다. 과거의 일본 문화와 생활 양식을 엿볼 수 있는 것 (=공예 미술품)이, 일본이 아닌 해외 박물관에 컬렉션의 형태로 보관되어 있다는 사실이 한편으로는 감사하기도 하나, 또 한편으로는 참으로 기묘하게 느껴진다.

덧붙이자면, 첫째 날은 독일 연방 공화국, 둘째 날은 오스트리아, 모두小提示볼트와 친숙한 양국의 주일 대사를 초청한 심포지움이었는데, 양일 모두 참가자가 100 명이 넘었으며, 지금까지는 알지 못했던 새로운 사실을 체험한 것이 단지 나 자신 뿐만은 아니었을 것이다.

기사 집필: 호시노 쯔토무 (星野勉)
(호세이 대학 국제 일본학 연구소 전 소장)

今号では初めての試みとして、以下を含め主なイベントの報告を、英語・中国語・韓国語の3外国語でもお届けしています。これは、3外国語それぞれを母国語とする国際日本学関係者3人の方々に、日本語での報告を読み間接的に、それを訳すなりまとめるなりして比較的自由に、作成していただきました。今回の試みについて、ご感想・ご意見をお寄せ下さい。

第2回合同研究会

- 日 時：2008年2月20日（水）～22日（金）
- 場 所：鹿児島県奄美市/鹿児島県大島郡喜界町

第3サブプロジェクト『日本の中の異文化』の本年（平成19年）度、第2回目の研究会は去る2月20日（水）、21日（木）と22日（金）の三日間にわたって鹿児島県奄美市と同大島郡喜界町で行われた。法政大学側からは、吉成直樹、間宮厚司、小口雅史、クライナー・ヨーゼフの4名、青森からは、青森市教育委員会の木村淳一と八戸市教育委員会の宇部則保両氏、鹿児島大学埋蔵文化財研究室准教授新里貴之氏、そして地元からは奄美博物館の高梨修と久伸博の学芸員2人及び喜界島文化財保護委員会の外内淳氏、計10人の研究者が参加した。

第1回目の去る9月13日、東京で開催した研究会で打ち出された問題提起を受けて、今回の研究会では主に9世紀から12世紀（平安末期から鎌倉はじめ）におよぶ2、3世紀の間大きく変動した大和国家の南の境界地域に光をあて、特に最近の発掘結果について討論、またそれと合わせて青森から参加して頂いた研究者から「北の境」、辺境地域の事情についての説明を受けながら議論を深めた。それによって南北両地帯の歴史的な違い又は類似性が少しずつはっきりとさせることができた。

第1日目は奄美市奄美博物館を場所に借りて、4つの報告並びに2つのコメント（久と外内両氏）を受けた。新里氏は先ず南西諸島（ここは大隈諸島、トカラ列島、奄美と沖縄諸島を含む）の土器編年や墓制の変化にもとづいて、貝塚時代のこの地域の物流ネットワークについて説明し、それ

に引き続いて高梨氏が「古代・中世の奄美諸島」との題の下で、自らの発掘である奄美市名瀬の小湊フワガネク遺跡群や最近注目されている大がかりな発掘が行われている城久（グスク）遺跡群（喜界島）について報告を行った。この場合は中国（越州窯系青磁）、朝鮮半島、日本内地（本州）との交易と並んで、徳之島産のカムイヤキ土器やヤコウ貝の交易も問題視された。

この二つの報告に対して、その場で「北」の事情に詳しい青森地方の専門家から青森市の新田（ニッタ）遺跡と八戸市のそれぞれの発掘成果を発表してもらったことは非常に効果的で、普段あまり交流の機会を持っていない、離れた地域で研究を続けている専門家が互いの発掘現場を視察する機会が得られたことこそはこのプロジェクトの長所であると言わざるを得ない。

第2日目は外内淳氏の案内で喜界島で先ず城久（グスク）遺跡を視察、発掘担当者澄田直敏から詳しい説明を受けた上で、島の他の史跡も見学できた。

第3日目は再び奄美市名瀬周辺を廻り、高梨修氏の案内で発表でもふれた小湊フワガネク遺跡をはじめ、中世の城郭遺跡群（特に平家渡来の伝説との関係がある浦上地区の平実盛城）を見学することができた。

[記事執筆：ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）]



ヨーゼフ・クライナー氏の講演会風景（奄美博物館）



喜界島の城久遺跡の発掘現場

Second Research Meeting of the Third Research Sub-Project: “Cultural Diversity in Japan”

February 20-22, 2008; Amami-shi and Kikai-chō, Ōshima-gun (Kagoshima Prefecture)

As agreed at the first meeting in Tokyo on September 13, 2007, this meeting focused on the southern frontier of the Yamato state, which developed dramatically between the ninth and twelfth centuries, and discussed the latest results of related excavation findings. Also, discussions were further developed with the participation of researchers from Aomori presenting on conditions at the northern frontier at the time. This proved to be a good opportunity for researchers of the northern and southern frontiers of the Yamato state to exchange the results of their research.

On Day One, the meeting was held at the Amami Museum in Amami-shi. NIIZATO Takayuki (University of Kagoshima) pre-

sented on the commodity distribution network during the Kaizuka (shell mound) Age, basing his study on changes in pottery styles and the cemetery system of the Seinan islands. TAKANASHI Osamu (Amami Museum) reported on the Amami islands during the ancient and middle ages, basing his presentation on archeological findings from his own excavation at Kominato Fuwaganeku in Naze (Amami-shi), and from the extensive site at Gusuku (Kikai-chō). To develop the comparative perspective, participants from Aomori presented on findings from excavations at Nitta (Aomori-shi), and Hachinohe-shi.

Day Two was spent visiting archeological sites at Gusuku and other sites of historical interest on Kikai Island, with commentary by TONOCHI Sunao, a member of the Cultural Properties Protection Committee of Kikai Island, and SUMITA Naotoshi, responsible for the excavation.

On the final day, the group visited Naze (Amami-shi) to observe the archeological sites at Kominato Fuwaganeku and a group of medieval castles including that in the Urakami area associated by legend with Taira no Sanemori.

研究课题③ “日本文化中的异文化”

第2次合同研究会

时间 2008年2月20日 ~ 2月22日

会址 鹿儿岛县奄美市/鹿儿岛县大岛郡喜界町

“日本文化中的异文化”是学术界的新研究课题——《站在异文化的角度研究“日本学”》研究课题之三，其目的是将目光转移到北部的东北·北海道和南部的琉球诸岛这两大领域，借此阐明日本文化的构造，开拓研究日本文化的新局面。作为此活动其中一环的第2次合同研究会，于2月20日~2月22日在鹿儿岛县奄美市以及同大岛郡喜界町举行。其中参加者包括来自本校的相关人员以及青森、鹿儿岛，还有奄美、喜界町当地的研究者总共10人。

〈研究会报告〉

平成19年2月20日、21日和22日，在鹿儿岛奄美市和同大岛郡喜界町举行了研究课题③“日本文化中的异文化”的第二次研究会。来自法政大学的吉成直树、间宫厚司、小口雅史、库拉那·瑶哲夫四位研究人员，和来自青森的青森市教育委员会的木村淳一，八户市教育委员会的宇部先生则保先生，鹿儿岛大学埋藏文物研究室准教授新里贵之先生，以及奄美博物馆的高梨修和久博的学芸员两人，还有，喜界岛文物保护单位的外内淳先生，合计10位研究者出席了本次会议。

此次会议接受了在去年9月13日于东京召开的第一次会议上提出的意见和建议，围绕自9世纪至12世纪（平安末期到镰仓初），经历了2、3个世纪大变动的大和国家的南部地域

进行了讨论。讨论中特别突出了近一阶段的考古发掘成果。另外，来自青森的研究者陈述了与此相呼应的“北部地域”的研究状况，使本次会议更加深化。从中，逐步明确了南北两地域在历史上的差异及类似性。

会议第1天借用了奄美市奄美博物馆为场地，包括4个报告和2个评论（久和内外两位先生）组成。新里先生首先以西南诸岛（这里包含了大隈诸岛，吐噶喇列岛，奄美和冲绳诸岛）的土器编年、墓制等的变化为基础，对这一地域在贝冢时代的物流网作了说明，与此相承高梨先生以“古代·中世的奄美诸岛”为题，作了关于奄美市自主发掘的名濑的小湊浮瓦嘎奈库遗迹群以及最近被世人广泛关注的大规模发掘中的久城（谷司库）遗迹群（喜界岛）的报告。报告将德之岛产的卡姆依雅克土器和夜光蝶螺的交易与中国（越州窑系青磁）、朝鲜半岛和日本内地（本州）的交易给予同种程度的重视。

会上，与这两份报告相呼应，对“北部”的情况很熟悉的青森地区的专家对青森市的心田遗迹和八户市的各种发掘成果也作了大信息量的发布。可以说本次研究会是一次难得的交流机会，在不同地域进行研究的专家们可以通过本次会议相互了解彼此的发掘现场，谨凭这一点本次会议就应当被记录下来。

第2天，在喜界岛与会人员通过外内淳先生作向导首先视察了城久遗迹，从发掘担当者澄田直敏处听取了详细说明，并参观了岛上其它史迹。

第3天主要在奄美市名濑周边活动。通过高梨修先生作讲解，与会人员对报告中提到的小湊浮瓦嘎奈库遗迹为主的中世纪城郭遗迹群（特别是与和平家渡来的传说有关系的浦上地区的平实盐城）进行了考察学习。

[记事执笔：瑶哲夫·库拉那（法政大学特任教授）]

연구보고회

서브·프로젝트③

「일본에 있어서의 이문화」 제 2 회 합동 연구회

●일시 : 2008년 2월 20일 (수) ~ 22일 (금)

●장소 : 가고시마현(鹿兒島県) 아마미시(奄美市)/가
고시마현(鹿兒島県) 오오시마군 기카이쵸(大
島郡喜界町)

올해 (평성 19년), 제 3 서브프로젝트 『일본에 있어서의 이문화(異文化)』의 제 2 차 연구회는 지난 2월 20일(水)부터 22일(金)까지 3 일간에 걸쳐, 가고시마현(鹿兒島県) 소재 아마미시(奄美市)와 오오시마군 기카이쵸(大島郡喜界町)에서 개최되었다. 호세이 대학(法政大学)에서는 요시나리 나오키(吉成直樹)씨, 마미야 아쓰시(間宮厚司)씨, 오구치 마사시(小口雅史)씨, 크라이너 요세프씨 등 4 명이, 아오모리(青森)에서는, 아오모리시 교육위원회의 기무라 준이치(木村淳一)씨와 하치노헤시(八戸市) 교육위원회의 우베노리야스(宇部則保)씨 등 2 명과, 가고시마대학 매장문화재(埋藏文化財)연구실 준교수 신자토 다카유키(新里貴之)씨를 비롯해, 현지에서는 아마미 박물관의 다카나시 오사무(高梨修)씨와 히사시 노부히로(久伸博)씨 등 학예원 2 명과 기카이시마(喜界島)문화재 보호위원회의 토노우치 스나오(外内淳)씨 등, 총 10 명의 연구자가 참가했다.

지난 9월 13일 도쿄에서 개최되었던 제 1 차 연구회에서 개진된 문체제기에 부응하여, 본 연구회에서는 주로 9세기부터 12세기, 즉 헤이안(平安) 말기에서 가마쿠라(鎌倉) 초기까지의 2, 3세기 동안에 큰 변화를 보인, 야마토(大和)국가의 남부 경계 지역에 서광을 비춘, 특히, 최근에 이루어진 발굴 결과에 관한 토론과, 또한 그 토론에 발맞추어 아오모리에서 참가해준 연구자들로부터 「북부 경계」, 변경 지역의 사정에 관한 설명을 청취한 후, 심도 깊은 토

론을 실시했다. 본 토론을 통해서 남북 양지대의 역사적 차이와 유사성을 점차적으로 확실히 인식하게 되었다.

첫번째 날은 아마미시 아마미 박물관을 빌려 4 편의 보고와 2 회의 코멘트(히사시씨와 토노우치씨)가 이루어졌다. 신자토씨는 우선 남서제도(南西諸島), 즉, 오오스미제도(大隈諸島), 도카라열도, 아마미(奄美), 오키나와제도(沖縄諸島)의 토기편년(土器編年)과 묘제(墓制)의 변화에 기초하여, 패총시대에 있어서의 이 지역의 물류 네트워크에 관하여 설명했고, 이어서 타카나시씨가 「고대·중세의 아마미 제도」라는 제목으로 본인이 직접 발굴한 아마미시 나제(名瀬)의 고미나토(小湊) 후와가네크 유적군과 최근 대규모 발굴로 주시되고 있는 구스크(城久) 유적군(기카이도 소재)에 관한 보고가 있었다. 이 보고에서는 중국(越州窯系青磁), 조선반도, 일본 본토의 혼슈(本州)와의 교역과 더불어 도쿠노시마(徳之島)산 가무이야키 토기와 야코우 조개의 교역도 거론되었다.

본 두 편의 보고에 관해서, 즉석에서 「북부」의 사정에 정통한 아오모리 지방의 전문가로부터 아오모리시 니타(新田)유적과 하치노헤시의 발굴 성과 발표가 있었던 것은 대단히 효과적이었으며, 평소 교류의 기회를 갖기가 어려운, 서로 멀리 떨어진 지역에서 연구를 계속하고 있는 전문가들이 각자의 발굴 현장까지 시찰할 수 있었던 것이야말로 이 프로젝트의 장점이라고 할 수 있다.

두번째 날은 토노우치씨의 안내로 기카이시마에서 구스크(城久)유적을 시찰, 발굴 담당자인 스미타 나오토시(澄田直敏)씨로부터 상세한 설명을 들은 후 섬에 소재한 다른 사적들도 견학했다.

세번째 날은 재차 아마미시 나제 주변을 돌면서, 타카나시씨의 안내로 발표에서도 거론되었던 고미나토 후와가네크 유적을 시작으로 중세 성곽 유적군(특히, 헤이안 도래 전설과 관계가 있는 우라가미(浦上)지구의 타이라노 사네모리성(平実盛城))을 견학했다.

기사 집필: 요세프·크라이너
(호세이 대학(法政大学) 특임교수)

2008年度第1回東アジア文化研究会

「日本社会・日本文化の周縁性と特異性」

伊藤 亞人

(琉球大学大学院人文社会科学部研究科教授)

● 日 時：2008年4月28日（月）18:30～20:30

● 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館 2階 国際日本学研究所セミナー室

「真の日本社会の特殊性とは何か」

2007年に東アジアにおける日本研究チームが中国の主要大学、研究機関の一部を対象に「日本文化への問いかけ」と題する事例調査をした。予想したとおり、日本研究者にとって刺激的な回答が多かった。日本社会の特殊性に注目した提言も少なくなかった。

ところで、日本人研究者はどのように自国の社会と文化の特殊性を考えているだろうか。日本文化の特殊性の研究者はまだ少ないのが実情であろう。琉球大学教授伊藤亞人氏は数少ない研究者の貴重なひとりである。近著『文化人類学で読む 日本の民俗社会』（有斐閣・2008年1月）は多大な啓発を受ける力作と思う。伊藤氏に2008年度における第一回研究会で「日本社会の特殊性と周縁性を考える」というテーマで報告していただいた。以下はその要約である。

近代化の先例になった日本は非西洋世界における近代化（産業・経済発展）のモデルではあるものの、日本社会の特殊性によってつくられた要因を、あらためて考えてみる必要があるという。

日本は地理的に東アジア文明圏に属する。東アジア文明には大伝統として論理体系的な人間論や世界観が認識されるにかかわらず、日本の受容は断片的にすぎない。仏教にしても土着化と習合化、儒教(朱子学)にしても武家社会中心にとどまり、民衆へは明治以降になって断片化されて普及したに過ぎない。日本の小伝統として位置づけ可能な感性的な自然観が基礎になっている。武士道、歌学、国学、民芸運動など、「もののあわれ」といった感性による追求であり、東アジアの大伝統からは遊離したところにある。

こうなった重要な理由として、島社会の閉鎖性があげられている。アジアにおいて日本は周縁の位置にあるけれども、自覚が乏しかったため、閉じこもった文化蓄積に気付くことがなかったという。幕末・明治以来のエリートの体質も周縁性の無自覚に起因し、理論を追求する弱さから正統性の根拠を西洋的価値観に求めた。一方で、日本の小伝統の自覚・認識の高揚から、和魂洋才という形でディレンマが生まれた。

伊藤氏は「技術・制度面の達成によって近代化の成功例という評価が下される中で、周縁的民俗文化の未開な様相（論理体系性の欠如）は見過ごされ、課題は先送りされ、ディレンマも自覚されることなく、文明・世界システムの中で排除されることなく存続しえたことこそが日本の特殊性といえる」という視点から、「日本社会・日本文化の特殊性とは、その近代経験過程において占めてきた位置と経験に起因するものである」と展開された。

最後に伊藤氏は周縁の様相に対する肯定的な評価をあげながら、こう指摘している。「日本社会における周縁性をめぐる経験は、日本に限定されたものではなく、社会のシステム化にともなう周縁性に関わる普遍的なディレンマとなっている」「日本社会におけるこうした特質をよく自覚することが、日本人がその伝統を生かしつつグローバルな社会における日本的な貢献に道を開く」と、このように結論付けられた。

目から鱗のような峻烈な報告という印象である。

【記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）】



伊藤 亞人氏



East Asian Cultural Studies: 2008 Lecture Series,
Number One

“The Unique and Peripheral Nature of
Japanese Society and Culture”

April 28, 2008; Ichigaya Campus, Hosei University

Professor ITO Abito, University of the Ryukyus

“What is the Uniqueness of Japanese Society?”

The first lecture in the 2008 Lecture Series on East Asian Cultural Studies was given by Professor ITO Abito, author of the recent book *Bunka jinrui-gaku de yomu Nihon no minzoku shakai* (Japanese folk society: A perspective from cultural anthropology). The theme of the lecture, based on his book, was “Understanding the unique and peripheral nature of Japanese society.”

The idea put forward was that, despite Japan being geographically situated in the East Asian Civilization block, it only shares fragments of the regional tradition of a logical and systematic approach to understanding Man and the world. For example, in Japan Buddhism has been indigenized and syncretized with

Shintoism, and for a long time the influence of Confucianism was limited to samurai society and only partially expanded to the masses after the Meiji era. Instead, Japanese understanding of Man and the world has been about sensibility to nature. In *bushidō* (Japanese chivalry), *kagaku* (poetry), *kokugaku* (nativism) and folk culture, the main objective has been the pursuit of *mono no aware* (aesthetic sense or sensibility).

The reclusive character of the island country was identified as the reason for this. It lacked self-awareness of being at the periphery of Asia and was not conscious of the closed nature of its cultural achievements. Hence, as members of the elite class from the late Edo period adopted Western values to rule the country, the peripheral nature of Japan in the global context did not interfere with their adaptation, which was made directly and without hesitation. At the same time, the opening up of the country led to the strengthening of traditional Japanese culture and values. The two created a dilemma that takes the form of *Wakon Yōsai* (Japanese spirit with Western learning).

The Professor ITO concluded that the dilemma experienced by Japan over its peripheral nature is not unique but, under similar conditions, is a phenomenon that occurs universally in the process of modernization.

第1次东亚文化研究会

“日本社会・日本文化的边缘性和特异性”

报告者 伊藤 亚人 先生

(琉球大学大学院人文社会科学研究科教授)

时间 2008年4月28日 18:30~20:30

会址 58年馆2层 国际日本学研究所会议室

主持 王 敏 (法政大学国际日本学研究所教授)

真正的日本社会的特殊性是什么

2007年东亚日本社会文化课题研究组对中国的一部分主要大学、研究机关进行了“对日本文化的质疑”为题的事例调查。其结果正如所料，有许多注目日本社会文化特殊性的提言。

但是，日本的研究者们怎样理解自己国家社会文化的特殊性呢。事实上，从事日本文化特殊性研究的研究成果还尚少。而琉球大学教授伊藤亚人先生就是为数不多的研究家之一。从其近著《从文化人类学角度来解读日本的民俗社会》(有斐阁·2008年1月)中我们可以得到很大启发。伊藤先生在本课题研究组主办的第1次东亚文化讨论会上做了“对日本社会的特殊性和边缘性的思考”的专题报告。概要如下。

率先实现近代化的日本在非西洋世界中一直被视为近代化(产业·经济发展)的楷模。然而，伊藤先生认为有必要重新审视日本社会的特殊性在这一过程中起到的重要作用。

日本在地理上属于东亚文明圈。尽管日本对于东亚文明的主体传统的论理体系及世界观有一定的认识，但其认知却并非全面。例如传入日本的佛教经过了本土化和折衷化，儒教(朱子学)也主要停留在武士阶层，而在民众中的普及则是明治以后才开始的，并且是片断化的普及。另一方面，相对以中国为中心的主体传统文化而言，日本本土的地域文化·日本文化被称

为小传统式文化，它注重感性认识，相对保持人物一体的生命观和自然观，深深的根植于其传统文化的底层，也浓重的覆盖在今日文化的表层。由其升华出来的武士道、诗歌学、国学、民艺运动等，几乎全部注重对“事物表象”的感性认识，与注重理念和思想的中国文化相异，以至于往往“游离于东亚大传统之外。”

造成这样结果的重要理由是岛国社会的封闭性。虽然日本处于亚洲的周边位置，但却因为对此缺乏自觉，对其文化积累的封闭式模式注意不够。即便是幕府末期和明治以来的杰出伟人，我们也可以发现其素质中尚存在着起因于周边性的无意识和不自觉，因而日本不太善于追求理论的入魂，而利用中国古典或西洋的理论和价值观作为正统的根据。不过，日本也存在着另外一面，即对日本式小传统的自觉认识不断高涨，近而孕育出和魂洋才的认识方法。两种认识就像两刃论一样。

伊藤先生还提到，“评价日本在技术·制度层面实现近代化的成功例子时，周边性的民俗文化中不开化的状况(如缺乏伦理体系)往往被忽视，以至对自我认识的局限缺乏一定的自觉。其实，这种状况的存续正是日本的特殊性”。不难看出，“日本社会·日本文化的特殊性起因于其步入近代进程中所占据的地理位置及缘起于此的体验和经验”。

最后，伊藤先生作了总结。他在对周边性特点给予客观分析并对其中具有积极意义的部分予以肯定评价的同时，根据源于其自身的现场调查和比较研究指出：“通过认识日本社会周边性我们可以得到的经验是，周边性这一特点不仅仅限定于日本，在其他周边岛国，区域也存在类似特点，并伴随社会系统化的明显而呈现出其共性。”“充分认识到日本社会的这种特点，才能使日本在发挥其传统的同时也能够对全球化社会发展作出应有的贡献”。

相信伊藤先生的观点于与会者受益非浅。

[记事执笔：王 敏 (法政大学国际日本学研究所教授)]

동아시아 연구회 보고

2008년도 제1회 동아시아 문화 연구회 진정한 일본 사회의 특수성은 무엇인가

이토 아비토 (伊藤亜人)

류큐 대학(琉球大学) 인문 사회 과학 연구과 교수

●일시 : 2008년 4월 28일 (월)

●장소 : 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스

58년관 2층 국제 일본학 연구 세미나실

2007년, 동아시아에 있어서의 일본 연구 팀이 중국의 주요 대학과 일부 연구 기관을 대상으로 「일본 문화에의 문체 제기」라는 테마로 사례 조사를 실시했다. 예상 대로, 일본 연구에 자극을 주는 회답이 많았다. 일본 사회의 특수성에 주목한 제언 또한 적지 않았다.

그런데, 일본인 연구자는 자국의 사회와 문화의 특성을 어떻게 생각하고 있는 것일까. 일본 문화의 특수성을 연구하는 연구자는 아직 소수에 불과한 실정일 것이다. 류큐 대학(琉球大学) 교수인 이토 아비토 (伊藤亜人)씨는 많지 않은 연구자들 중 귀중한 사람이다. 최근의 저서 『문화 인류학으로 읽는 일본의 민속사회』(有斐閣·2008년 1월)는 대단히 계발적인 역작이라 생각된다. 이토씨는 2008년도 제1회 연구회에서 「일본 사회의 특수성과 주변성을 생각한다」라는 테마로 보고를 해주었다. 이하 보고의 요약이다.

근대화의 선례가 된 일본은 비서양세계의 근대화 (산업·경제 발전) 모델이기는 하나, 일본 사회의 특수성이 형성된 요인은 재고해 볼 필요가 있다.

일본은 지리적으로 동아시아 문명권에 속한다. 동아시아 문명에서는 대전통(大伝統)으로서 논리 체계적인 인간론과 세계관이 인식되어지고 있음에도 불구하고, 일본에 있어서는 단편적인 수용에 불과하다. 불교의 예를 들더라도 토착화와 절충이, 유교(주자학)의 예를 보더라도 무가 사회 중심에만 머물렀을 뿐, 민중에게는 메이지 이후에 이르

러서야 그것도 단편화된 형태로 보급되었다. 이에선 일본의 소전통(小伝統)이라 할 수 있는 감성적 자연관이 그 기초를 이루고 있다고 할 수 있다. 무사도, 가학(歌学), 국학, 민예 운동 등은 「무상함」이라고 하는 감성의 추구에 의해 이루어졌으며, 동아시아의 대전통으로부터는 유리되어 있다.

이토씨는 이런 결과를 초래한 이유로서, 섬 사회의 폐쇄성을 거론하고 있다. 아시아 내에서도 일본은 주변에 위치하고 있으나 충분히 자각하지 못했던 탓에, 자폐적 문화 축적을 자각하지 못했다고 강조했다. 막부 말기·메이지 이후 엘리트의 체질도 주변성의 무지각에 기인하는데, 이론 추구의 빈약함으로 인해 정통성의 근거를 서양적 가치관에서 찾곤 했다. 반면, 일본인의 소전통의 자각·인식의 고양으로부터 和魂洋才(와콘요사이=일본 고유의 정신을 잃지 않으면서 서양의 문화를 수용함—翻譯者)라고 하는 형태의 딜레마가 생겨났다.

이토씨는 「기술·제도면의 달성에 의해 근대화의 성공 사례로 평가되어지는 과정에서, 주변적 민속 문화의 미개한 양상(논리 체계성의 결여)은 간과되고, 과제는 미루어졌으며, 딜레마 또한 자각되지 않은 채, 문명·세계 시스템 안에서 배제되지 않고 존속할 수 있었던 것이 일본의 특수성이라 할 수 있다」라는 시점에서, 「일본 사회·일본 문화의 특수성은 근대를 경험하는 과정에 있어서 차지해 온 일본의 위치와 경험에 기인한다」는 논리를 전개하였다.

마지막으로 이토씨는 주변적 양상에 대한 긍정적 평가와 함께 이렇게 지적했다. 「일본 사회의 주변성과 관련된 경험은 일본에만 한정된 것이 아니고, 사회의 시스템화에 동반되는, 주변성에 관계된 보편적인 딜레마이다」 「일본 사회의 이러한 특질을 정확히 자각하는 것이 일본인이 그 전통을 살리면서도, 글로벌 사회에 있어서 일본적인 공헌의 길을 여는 것」이라고 결론지었다.

대단히 참신하고 준열한 보고서라는 인상을 남겼다.

기사 집필: 왕민(王敏)

(호세이 대학 국제 일본학 연구소 교수)

2008年度第2回東アジア文化研究会 「青潮文化論は可能か」

赤坂 憲雄

(東北芸術工科大学院長・同大学東北文化研究センター所長)

- 日 時：2008年5月14日（水）18:30～20:30
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 25階 B会議室

赤坂憲雄氏が語る「『青潮文化論』の可能性」

民俗学者・福島県立博物館館長・東北芸術工科大学東北文化研究センター所長の赤坂憲雄教授は、『青潮文化論』に啓発されて、環日本海文化をみずから歩いて考察された。青潮文化論とは市川健夫氏の説で、黒潮による文化伝播と並んで、対馬海流やリマン海流によるもう一つの文化伝播をいう。

列島の島々から韓国・濟州島へ、海女、イカ神社、青椿、ブナ林、蹄耕、赤米など、もの、ひと、自然が青潮によって大循環している。赤坂氏によると、それらの事象は青潮文化の基層を成す一方で、ご自身の提唱する東北学ともつながっているとし、日本文化の多様性を示しているという。さらに、それは東アジアに広がり、混合し、文化的共生体を形成しているとされる。

赤坂氏は東北、日本、東アジアをひたすら往復し、活発に探索成果を発表されている。1996年に出版された『東北学へ』の3部作（いずれも作品社）のほか、単著20点、共著7点、編著も多数。

「柳田国男の思想の奇跡を辿りながら、その限界と可能性を問いつけてきた。柳田とその民俗学は常民・稲作・祖先崇拜などを核とする<一国民俗学>に結晶した。それはあきらかに、近代に生成を遂げた<ひとつの日本>を、民

俗学の名のもとに、下方から血肉化させるための知の営みでもあった。いま、その<ひとつの日本>の破綻がそこかしこに露出しつつある。そうして島国国家論・稲作中心史観・単一民族＝国家論といった、<ひとつの日本>を支えてきた枠組みそれ自体を壊し、アジアに向けて開かれたくいくつもの日本>を浮き彫りにすることが求められている」。

赤坂氏の研究分野は民俗学にとどまらず、歴史学と思想学など幅広く及ぶ。『青潮文化論』の示す事例と現象を東アジア文化の広がりの中で比較・検証し、東北ないし日本文化論の新展開を開拓し続けている。

「柳田がついに語ることのなかった、もうひとつの東北像を模索しながら、<いくつもの日本>への扉」が開かれることを期待しつつ、「柳田以後の民俗学のあらたな可能性が芽生えるにちがいない」。そして、みずから『青潮文化論』の研究事例をあげて研究の方向性と手法を東アジア文化の次元へ大きく、広く展開させる可能性を示されたように思う。赤坂先生にあらためて感謝申しあげる。

(文中の引用は1995年、赤坂氏の山崎賞受賞記念講演より抜粋している)

[記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）]



赤坂 憲雄氏



East Asian Cultural Studies: 2008 Lecture Series,
Number Two
“Is the Concept of ‘Aoshio Cultural Studies’
Feasible”

May 14, 2008; Ichigaya Campus, Hosei University

Professor AKASAKA Norio, Tōhoku University of Art &
Design

“The Potential for Aoshio Cultural Studies”

Professor AKASAKA Norio is Director of the Graduate School, Tōhoku University of Art & Design, Director of the university's Tōhoku Culture Research Center, and Director of the Fukushima Museum. As a pioneer of Tōhoku Studies, he has developed the field of “Aoshio cultural studies,” which was originally proposed by Professor ICHIKAWA Takeo. The field of Kuroshio (‘Black Current’) cultural studies is well known. The field of Aoshio (‘Blue Current’) cultural studies, on the other hand, is the not-so-well studied route of cultural dissemination along the Tsushima Current and the Liman Current, which flow between the Eurasian continent and the Japanese islands.

The Aoshio perspective on cultural dissemination argues that cultural elements and vegetation, such as *ama* divers, *ika* (squid) shrines, *camellia japonica*, beech trees, the hoof-cultivation method and red rice, have disseminated along the Aoshio currents from the Japanese islands into Cheju Island (Korea) to form a cultural region. Professor Akasaka argues that Aoshio culture has also contributed to the development of Tōhoku culture in the northeastern regions of mainland Japan. Aoshio culture is indicative of the diversity of Japanese culture, and further it has spread into East Asia to form part of its cultural melange.

Professor Akasaka has also followed the research of YANAGITA Kunio (1875-1962), the pioneer of Japanese native ethnology, and has questioned its potential and limitations. Yanagita identified *jōmin* (common folk), rice cultivation and ancestral worship as forming the core of Japanese folk culture. His folklore studies are often criticized as having formed a “one-state folklore,” an intellectual process of creating the concept of “one Japan” under the name of folklore. However arguments that supported the “one Japan” theory—such as the island-country state theory, the centralism of rice cultivation culture, and the monoethnic state—are no longer effective today, and a new vision of a diverse Japan is needed.

第2次东亚文化研究会

“青潮文化论之可能性”

报告者 赤坂 宪雄 先生（东北艺术工科大学大学院
长/东北文化研究中心所长）

时间 2008年5月14日 18:30~20:30

会址 市谷校区 保阿所纳得塔教学楼 25层B会议室

主持 王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

赤坂宪雄先生论述“《青潮文化论》的可能性”

民俗学者·福岛县立博物馆馆长·东北艺术工科大学东北文化研究中心所长赤坂宪雄教授受“青潮文化论”的启发，亲自对环日本海文化进行了现场考察。青潮文化论是市川健夫先生的学说。他认为与黑潮海流传播的文化相并列，在对马海流、利曼海流存在着又一条文化传播之源。

伴随列岛流经韩国·济州岛的海流，可以发现两岸有着许许多多的类同。比如海女，伊卡神社、青椿、山毛榉林、蹄耕、赤米等等。类同的人、物以及自然生态沿着青潮海流往返流逝，跨越时空无限循环。根据赤坂先生的研究，这种大循环现象称为青潮文化的基层，其特点与其自身提倡的东北学相似，展示了日本文化的多样性。而且，这样的循环面向东亚扩展、融合，形成了多元的文化共生体。

赤坂先生多次往返于日本的东北地区、韩国、东亚并积极发表其研究成果。其中包括1996年提出的“东北学的创生”三部曲（作品社），以及个人著作20部，集体作品7部等大量论作。

赤坂先生对自身的研究这样自我定位：“我追溯柳田国男思想的伟绩，同时也探索其局限和可能性。柳田国男的民俗学以常民·稻作·祖先崇拜等为核心，架构了‘一国民俗学’的智慧框架。显然，基于柳田国男的研究成果，日本自近代以来在民俗学领域构筑了‘一个日本’，的视角，并使其从底部开始系统化。然而，时代发展至今，‘一个日本’的视角露出了破绽。所谓岛国国家论·稻作中心史观·单一民族=国家论，支撑‘一个日本’的框架主体出现了裂痕，而置身面向亚洲的‘多元日本’的轮廓已逐渐显露出来”。

赤坂先生的研究并不局限于民俗学，也涉及历史学，思想学等广泛领域。而《青潮文化论》所展示的事例和现象在其所描绘的东亚文化框架中也得到了比较和检验，同时波及东北学的创生，乃至促进其日本研究的发展。

赤坂先生试图通过“摸索柳田国男未提及的多元的东北地区的实态，打开通向〈多元文化日本〉之门”，促发“柳田国男而后的民俗学的发展。”而《青潮文化论》的研究为其整体研究之一例，统归为拓展研究方向和方法论的探讨。显然，赤坂先生的多方位研究目标瞄准了东亚文化的大框架，将日本置于东亚，探索与东亚的共性，追寻日本的局限，进而寻求与亚洲共生的新起点。

（文中引用1995年，赤坂先生的山崎奖授纪念演讲的摘录）

[记事执笔：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）]

2008 년도 제 2 회 동아시아문화 연구회

「아오시오 (靑潮) 문화론은 가능성한가」

아카사카 노리오(赤坂憲雄)

(도호쿠 예술 공과 대학원장 (東北芸術工科大学院) ·

동대학 동북 문화 연구 센터 소장)

●일시 : 2008 년 5 월 14 일 (수) 18 : 30~20 : 30

●장소 : 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스
보아소나드 타워 25 층 B 회의실

민속학자 · 후쿠시마현립(福島県立) 박물관 관장 · 동북 문화 센터 소장인 아카사카 노리오교수는 『아오시오(靑潮) 문화론』에 계발되어, 환 일본해 문화(環日本海文化)를 발로 걸어서 고찰하였다. 아오시오 문화론이란 이치카와 타케오(市川健夫)씨의 설로, 구로시오(黒潮)에 의한 문화 전파와 더불어, 쓰시마(対馬) 해류나 리만 해류에 의한 또 다른 문화 전파를 일컫는다.

일본 열도의 섬들로부터 한국 · 제주도로, 해녀, 이카신사, 청 동백, 너도밤나무 숲, 제경(蹄耕-동물을 이용하여 경작함- 翻訳者), 적미(赤米) 등, 사물, 사람, 자연이 아오시오에 의해서 대순환하고 있다. 아카사카씨에 의하면, 이러한 현상들은 아오시오 문화의 기반을 형성하는 한편, 본인 자신이 제창하고 있는 동북학과도 관련되어 있으며, 일본 문화의 다양성을 나타내고 있다고 한다. 또한 이는 동아시아로 확산, 혼합되어 문화적 공생체를 형성하고 있다고 볼 수 있다.

아카사카씨는 동북, 일본, 동아시아를 한결같이 오가고 있으며, 활발하게 탐색 성과를 발표하고 있다. 1996 년에 출판된 『동북학으로』 3 부작(모두 作品社) 이외에, 단독 저술 20 편, 공저 7 편, 편저도 다수.

「야나기타 구니오(柳田国男) 사상의 기적을 따라서 그 한계와 가능성을 탐색해 왔다. 야나기타와 그의 민속학은 서민, 벼 농사, 조상 숭배 등을 핵으로 하는 <일국 민속학(一国民俗学)>으로 결실을 맺었다. 그것은 분명, 근대에 생성된 <하나의 일본>을, 민속학의 이름으로 하부에서부터 혈육화하기 위한 지혜이기도 했다. 오늘 날 그 <하나의 일본>의 파탄이 여기저기에서 모습을 드러내고 있다. 그리고, 섬나라 국가론, 벼 농사 중심 사관, 단일 민족=국가론과 같은 <하나의 일본>을 지탱해 왔던 구조 자체를 파괴하여, 아시아를 향해 열린 <다수의 일본>을 부각시키는 것이 요청되고 있다」

아카사카씨의 연구 분야는 단지 민속학에 머무르지 않고, 역사학과 사상학 등 광범위하게 확대되어 있다. 『아오시오 문화론』이 보여 주는 사례와 현상을 동아시아의 확산 안에서 비교 · 검토하여, 동북 내지 일본 문화론의 새로운 전개를 개척하고 있다.

「야나기타가 끝내 말하지 않았던, 또 하나의 동북상을 모색하면서, <다수의 일본>을 향한 문이 열릴」것을 기대하며, 「야나기타이후 민속학의 새로운 가능성이 싹틀 것을 확신한다.」 그리하여, 스스로 『아오시오 문화론』의 연구 사례를 실례로 연구의 방향성과 방법을 동아시아 문화 차원으로 크게, 넓게 전개시키는 가능성을 보여 주었다고 생각한다.

감사합니다.

(문중의 인용은 1995 년, 아카사카씨의 야마자키상(山崎賞) 수상 기념 강연에서 발췌한 것임)

기사 집필: 왕민(王敏)

(호세이 대학 국제 일본학 연구소 교수)

2008年度第3回東アジア文化研究会

「2・1・0－東アジアの文化・文明論的構造」

小倉 紀蔵

(京都大学大学院人間・環境学研究科准教授)

- 日 時：2008年6月6日(金) 18:30～20:30
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階 国際日本学研究所セミナー室

2008年6月6日(金)、18時30分から20時30分過ぎまで、法政大学市ヶ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室において、2008年度第3回東アジア文化研究会が開催された。今回は、京都大学大学院人間・環境学研究科准教授の小倉紀蔵氏をお招きし、「2・1・0－東アジアの文化・文明論的構造」という演題のもとで行われた。

今回の報告では「2・1・0－東アジアの文化・文明論的構造一」と題し、中国・朝鮮・日本の3国それぞれの権力者・思想家による「自己規定」(自国規定)と、それぞれの国に対する批判が実は相互依存の関係にあり、そこから誤解や偏見が増幅していくメカニズムを提示して頂いた。表題以外にも多くの韓国研究の現状について言及があったが、ここでは主要な論点のみを取り上げる。

2・1・0－東アジアの文化・文明論的構造一について

東アジア3国(中国・朝鮮・日本)は、伝統的に自国の文化・文明論的立場をそれぞれ〈2・1・0〉と規定する傾向をもっていたと仮定する。ここで2とは「文明」(「普遍運動」)、1とは「文化」(「固定した文明」)、0とは「非文明、非文化」(2でも1でもないもの)の謂いで、このような本質主義的な規定は端的に「錯視であり」、「誤謬ではある」が、このようにみならずことで新しい3国関係が見えてくるのではないかと考える。

中国は自己を「文明」(2)の中心と認識、朝鮮は中華文明の枠のなかにある「文化」(1)として自己を規定する。これに対して日本は中国文明から逸脱した「非文明、非文化」(0)と自己を規定する。

朝鮮は自己を「文化」(1)とし、中国文化の正統な継承者として朱子学を奉じ、ついには「小中華思想」(中国以上に朱子学を重んじた社会を形成した)を掲げ、日本を「非文明、非文化」(0)とし、日本との比較の中で自らの正統性をさらに強調していく。朝鮮からみれば日本は無思想であるがゆえに批判の対象となる。

他方、日本は逆に、朝鮮が「文化」(1)に固執して朱子学を堅持する保守的な国とみなし、日本は「非文明、非文化」(0)だからこそアジアにありながら早期に近代化したと自負する。したがって、日本から見ると朝鮮は「文化」(1)であるがゆえに固定的でオリジナリティーがなく、発展しないとの批判対象となる。それゆえ日本は「非文明、非文化」であることを、さらに自負することになる。

つまり、互いに自負している点が、互いに批判の対象であり、その批判を通して、いっそう自己規定を強めるという循環的な相互依存関係になっているのであり、しかも中国との関係で考えれば、朝鮮はつねに中国以上に中国的であることを目指し、日本は逆に島国であるから中国的な考え方から脱することができたことを誇るということになる。

このすれ違いからくる誤解や偏見が増幅していく相互依存の関係を、〈2・1・0〉という数字で可視化し、互いの固定的な見方を意識化することで、誤解を克服する一助にしたい。

以上が主要な論点であった。なお、当日は論文「〈2・1・0〉…東アジアの文化・文明論的構造」(『比較文明』22号、2006年11月)の抜刷が配布された。興味のある方は、そちらも参

照されたい。

このほか前半には韓国研究の現状以外にも日本のアカデミズムにおける無自覚な西洋の方法論の濫用について辛辣な批判がなされるなど、刺激的な報告であった。冒頭で専門は「韓国哲学」との自己紹介があり、「韓国哲学」という聞きなれない分野についてのレクチャーもあったが、そこでの「韓国をフィールドとしています」という言い方のなかに、従来の哲学研究者にない「実感」を重視する意志が強く感じられた。何故その方法論を用いるのか、何故その地域を研究するのか、本来なら当然議論されなければならない前提がないがしろにされ、業績の為の論文が量産されている昨今の現状に反省を迫る場面もあった。

今回の報告を聞き第2回東アジア文化研究会、赤坂憲雄氏の報告の際と同様に感じたことがある。すなわち、赤坂氏の「さまざま日本」「青潮文化論」といった議論にみられる近代統一国家、ナショナリズムに対する批判は、フィールドワークのなかでの「実感」から出発している。青潮文化圏や多様な地域のあり様を实地踏査した経験から「日本」は一つではないとの問題意識をもち得たにちがいない。アンダーソンの「想像の共同体」まずありきではないナショナリズム批判のあり方は、さらになお多様にあるはずだ。実感からはじまる学問こそ信用に足るものではないのか。小倉氏の議論とその緊張感から、改めてそう感じた。

[記事執筆：今泉 隆裕]

(法政大学国際日本学研究所学術研究員、
桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部講師)



小倉 紀蔵氏

East Asian Cultural Studies: 2008 Lecture Series,
Number Three
“2·1·0: The Structure of Culture and
Civilization in East Asia”

June 6, 2008; Ichigaya Campus, Hosei University
Associate Professor OGURA Kizō, Graduate School,
University of Kyoto

Professor Ogura argued that China, Korea and Japan have traditionally recognized their relative positions with regard to culture and civilization as “2·1·0 relations,” in which (2) symbolizes “civilization” (universal and uninterrupted), (1) symbolizes “culture” (fixed civilization), and (0) symbolizes “non-civilization and non-culture” (neither 2 nor 1). This metaphor facilitates a deeper understanding of the relationship between the three countries.

China has traditionally recognized itself as the center of “(2) civilization,” while Korea has self-defined itself as a follower of

(2), i.e. a “(1) culture” within “(2) civilization,” by strongly embracing Neo-Confucianism (Jp. Shushigaku) to become a “petit Sino-centric” state, with its society valuing Neo-Confucianism more highly than in China.

On the other hand, Japan has tended to recognize itself as a “(0) non-civilization and non-culture” and has deviated away from Chinese civilization. Korea has viewed this as a point for which Japan should be criticized. In contrast, Japan has viewed Korea as a conservative country lacking in originality, persistently limiting itself to “(1) culture.” Japan believes that being free from Chinese civilization enabled it to become the first modernized state in Asia, and this belief has made it even more proud of its “(0) non-civilization and non-culture.”

In summary, Professor Ogura argues Korea and Japanese share this consciousness of their positions vis-à-vis China with regard to culture and civilization. While each has been proud of its own position, they have been critical of each other's. It is hoped that this “2·1·0 relations” theory will help overcome mutual misunderstanding by prompting self-awareness of these prejudices.

第3次东亚文化研究会

“2·1·0 — 东亚的文化·文明论的构造”

时间 2008年6月6日 18:30~20:30

会址 市谷校区 58年馆2层国际日本学研究所会议室

主持 王敏 (法政大学国际日本学研究所教授)

本次会议邀请到了曾任外务省“日韩友情2005”委员, NHK“韩语讲座”讲师, 以“韩国哲学”为专业的京都大学大学院人类·环境学研究科准教授小仓纪藏先生。小仓先生在大学里学习了德国文学后, 通过广告代理店的工作到韩国留学。取得首尔大学大学院哲学科博士课程单位后回国, 在东海大学外国语教育中心任专任讲师, 并担任过同大学助教授。

这次的报告以“2·1·0—东亚的文化·文明论的构造——”为题, 提出了中国·朝鲜·日本3国的各自的权利者·思想家作出的“自我规定”(自国规定)与3国间彼此相互地批判实际上是相互依存的关系, 指出了由此导致了误解偏见增加。此外还提到了很多韩国研究的现状, 这里仅例举主要点进行说明。关于2·1·0—东亚的文化·文明论的构造——

假定东亚3国(中国, 朝鲜, 日本)在传统上有将自国的文化·文明论的立场各自按(2·1·0)规定的倾向。在这里, 2指“文明”(“普遍运动”), 1指“文化”(“固定文明”), 0指“非文明, 非文化”(既不是2也不是1的事物), 虽然这样的本质主义式的规定存在明显的“错视”·“谬误”, 但是能从这样的假定中看出新的三国关系。

中国将自己视为“文明”(2)的中心, 朝鲜是中华文明框架下的“文化”(1)。与此相对日本是脱离中国文明的“非文明, 非文化”(0)。

朝鲜以自己为“文化”(1), 信奉作为中国文化正统继承者的朱子学, 提出“小中华思想”(形成了比中国重视朱子学的社会), 日本是“非文明, 非文化”(0), 通过和日本的比较更加强调自身的正统性。在朝鲜看来日本是无思想的故而成为批判对象。

另一方面, 日本则相反, 认为朝鲜固执于文化(1)是坚守

朱子学的保守国家, 而日本正因为是“非文明, 非文化”(0)所以尽管身处亚洲也可以很早实现现代化, 并以此自负。因而, 在日本看来朝鲜因为是文化(1)故而是固定的没有创新, 成为缺乏发展的批判对象。因此, 对于日本“非文明, 非文化”更加自负。

总之, 相互自负的原因成为相互批判的对象, 通过批判, 更加强了自我的规定, 形成了循环的相互依存关系, 并且如果设想和中国的关系, 朝鲜时常以比中国还中国为目标, 日本相反以因为是岛国所以可以从中国式的思维方式中脱离出来而自诩。

本报告将像这样的交错所引起的误解偏见不断增加且相互依存的关系以(2·1·0)这组数字将其可视化, 将互相固定的成见意识化, 为克服误解出一臂之力。

以上是主要论点。当日还分发了论文“(2·1·0)…东亚文化·文明论的构造”(《比较文明》22号, 2006年11月)。感兴趣的话也可以作为参考。

此外前半部分是韩国研究现状以外的日本学院式的对无自觉地滥用西洋式方法论的辛辣地批判等, 是场很激动人心的报告。开头以“韩国哲学”进入主题, 对人们不太熟悉的“韩国哲学”领域的解说, 这里的“韩国作为场”的提法中, 可以强烈感受到以往的哲学研究者所没有的重视“实感”的意志。为什么用那样的方法论, 为什么研究那个地域, 迫使人们反省为什么这些本来当然必须讨论的前提被轻视, 出现了为了业绩量产论文的现状。

听了这次的报告有和第2次东亚文化研究会上听赤坂宪雄氏同样的感想。即, 赤坂先生的“多种多样的日本”“青潮文化论”的议论中可以看出对近代统一国家、民族主义的批评是从实地调查中的“实感”出发的。从对青潮文化圈, 多样性地域的情况进行实地考察的经验中得出了“日本”不只是一个的结论。安德森的“想象的共同体”认为首先对民族主义应有的批判, 更加应该有多样的样式。从小仓先生的议论中再次感受到了只有从实感开始的学问才是可信的。

[记事执笔: 今泉 隆裕

(法政大学国际日本学研究所学术研究员。桐荫横滨大学运动健康政策学部讲师)]

제 3 회 동아시아문화 연구회
 「2·1·0－동아시아의 문화·문명론적 구조－」

오구라 키조 (小倉紀藏)

교토 대학(京都大学)대학원 인간·환경학 연구과 준교수

●일시 : 2008년 6월 6일 (金) 18:30~20:30

●장소 : 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스
 58년관 2층 국제 일본학 연구 세미나실

2008년 6월 6일 (金)、18시 30분부터 20시 30분까지, 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제 일본학 연구 세미나실에서 2008년도 제 3회 동아시아문화 연구회가 개최되었다. 이번에는 교토 대학 (京都大学) 대학원 인간·환경학 연구과 준교수 오구라 키조 (小倉紀藏) 씨를 초빙하여, 「2·1·0－동아시아의 문화·문명론적 구조－」라는 타이틀로 강연회를 열었다.

본 보고는 「2·1·0－동아시아의 문화·문명론적 구조－」라는 타이틀로 중국·조선·일본 3국의 권력자·사상가에 의한 「자기 규정」(자국 규정) 과, 그들의 국가에 대한 비판이 사실상 상호 의존 관계에 있었고, 그러한 관계에 의해서 오해와 편견이 증폭되어 가는 메카니즘이 제시되었다. 표제 이외에도 한국 연구의 현재 상황에 관해 다수 언급되었으나, 본 보고서에서는 중요한 논점만을 거론하고자 한다.

2·1·0－동아시아의 문화·문명론적 구조－에 관하여

동아시아 3국 (중국·조선·일본) 은, 전통적으로 자국의 문화·문명론적 입장을 각각 <2·1·0> 으로 규정하려는 경향이 있었다고 가정하자. 여기에서 2는 「문명」(「보편운동」) 을, 1은 「문화」(「고정된 문명」) 를, 0은 「비문명·비문화」(2도 1도 아닌 것) 를 일컫는 것인데, 이와 같은 본질주의적인 규정은 단적으로 말하자면 「착시이며」, 「오류이다」. 그러나 이렇게 가정함으로 인해서 새로운 형태의 3국 관계가 가시화되지 않을까 하는 생각이 든다.

중국은 자신을 「문명」(2)의 중심으로 인식하고, 조선은 중화 문명의 틀 안에 있는 「문화」(1)로서 자신을 규정한다. 이에 비해 일본은 중국 문명에서 일탈한 「비문명·비문화」(0)로서 자신을 규정한다.

조선은 자신을 「문화」(1)라 하여, 중국 문화의 정통 계승자로서 주자학을 신봉하고, 결국에는 「소중화사상」(중국 이상으로 주자학을 중시하는 사회를 형성했다)을 내세워, 일본을 「비문명·비문화」(0)로 여기고, 일본과의 비교를 통해서 스스로의 정통성을 더욱 더 강조해 간다. 조선의 입장에서 보면, 일본은 사상이 없기 때문에 비판의 대상이 된다.

반면, 일본은 반대로, 조선을 「문화」(1)를 고집하여

주자학을 견지하는 보수적인 국가로 간주하는 한편, 일본은 「비문명·비문화」(0)이기 때문에 오히려 아시아에 속해 있으면서도 조기에 근대화할 수 있었다고 자부한다. 따라서, 일본 쪽에서 보면 조선은 「문화」(1)이므로 고정적이고 오리지널리티가 없으며, 발전하지 않는다는 비판의 대상이 된다. 그런 까닭으로 일본은 자신이 「비문명·비문화」인 점을 한층 더 자부하게 된다.

즉, 서로 자부하고 있는 점이 서로에게 비판의 대상이 되고, 그러한 비판을 통해, 자기 규정을 한층 강화해 간다는 순환적 상호 의존 관계를 갖고 있다. 더욱이 대 중국 관계의 관점에서 보면, 조선은 항상 중국 이상으로 중국적일 것을 지향하고, 일본은 반대로 섬나라이기 때문에 중국적인 사고로부터 탈피할 수 있었던 점을 자부하고 있는 것이다.

이러한 견해의 차이에서 유래한 오해와 편견이 증폭되어 가는 상호 의존 관계를 <2·1·0>이라는 숫자로 가시화하여, 서로의 고정적인 견해를 의식화함으로 인해서 오해를 극복하는 데에 일조하고자 한다.

이상이 주요 논점이었다. 또한 보고 당일 논문 「<2·1·0>…동아시아의 문화·문명론적 구조」(『比較文明』22号、2006年11月)의 발췌가 배포되었다. 관심이 있는 분은 참고하시기 바란다.

보고의 전반은 한국 연구의 현재 상황 이외에도, 일본 아카데미즘에 있어서의 서양 방법론의 무지각한 남용에 관한 신랄한 비판 등, 자극적인 보고였다. 서두에서 전문은 「한국 철학」이라는 자기 소개가 있었고, 「한국 철학」이라는 익숙치 않은 분야에 관한 강의도 있었는데, 그 중 「한국을 필드로 삼고 있습니다」라는 표현에서, 종래의 철학 연구자에게는 없는 「실감」을 중시하고자 하는 의지가 강하게 느껴졌다. 왜 그러한 방법론을 사용하는가, 왜 그 지역을 연구하는가 등, 통상적으로 당연히 논의 되어야 할 전제가 무시된 채, 업적을 위한 논문이 양산되고 있는 오늘 날의 행태에 반성을 촉구하는 발언도 있었다.

본 보고를 청취하면서 제2회 동아시아문화 연구회에서 발표되었던 아카사카 노리오 (赤坂憲雄) 씨의 보고와 유사한 점을 느꼈다. 즉, 아카사카씨의 「다양한 일본」, 「아오시오 문화론」 논의에서 볼 수 있는 근대 통일 국가, 내소널리즘에 대한 비판은 필드 워크 안에서의 「실감」으로부터 출발한 것이다. 아오시오 문화권이나 다양한 지역의 양태를 현지 답사한 경험을 통해서 「일본」은 하나가 아니라 는 문제 의식을 갖게 되었을 것이다. 앤더슨의 「상상의 공동체」를 기본 개념으로 하지 않는 내소널리즘 비판은 수없이 존재할 것이다. 실감으로부터 시작되는 학문이야말로 신용할 수 있는 학문이라는 것을 오구라씨의 논의와 긴장감에서 새삼 느꼈다.

기사 집필 : 이마이즈미 타카히로 (今泉 隆裕)

(호세이 대학 국제 일본학 연구소 학술 연구원 토인 요코하마 대학 (桐蔭横浜大学) 스포츠 건강 정책 학부 강사)

天皇・天皇制アルザスシンポジウムにむけての第1回勉強会

学術フロンティア・サブプロジェクト① 異文化研究としての「国際日本学」の構築

「中世における天皇について」

河内 洋輔 (法政大学文学部史学科教授)

- 日 時：2008年6月14日(土) 14:00～16:30
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館 2階 国際日本学研究所セミナー室

2008年6月14日(土)、14時00分から16時30分過ぎまで、法政大学市ヶ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室において、「天皇・天皇制アルザスシンポジウムにむけての第1回勉強会」が開かれた。今回は法政大学文学部史学科教授河内洋輔氏から、「中世における天皇について」というテーマでレクチャーをしていただいた。

内輪の勉強会ということもあって10名ほどの参加者であったが、日本の天皇・天皇制の根幹に触れる「正統(しょうとう)」の考え方を、主に中世の代表的天皇論である北畠親房『神皇正統記』や慈円の『愚管抄』から引いて、詳しく説明していただいた。

すなわち、父子継承、血統に固執する「正統」の理念は明治維新で朝廷が解体されて消滅まで、日本の古代から、中世、近世に至るまで、わが国の皇位継承を導いてきたものである。この考え方から、同じ天皇にも「直系」と「傍系」の区別がなされ、またこの考え方故に、「正統」の選別

をめぐって、政治の大動揺もしばしば生じてきたのである。

そしてこの「正統」の考え方は、天皇・貴族・武士は神々の子孫であるという神国思想と結ばれて、朝廷の由来や支配の正当性を担保するものとして機能した一方で、このように天皇は限られた血統からしか出ないということで、それゆえに天皇の資質は保証されない、天皇は貴族の補佐によってこそその地位を全うさせることができる、といった天皇と実効権力との乖離を言う立場をも可能にしてきたのである。

以上、今回の勉強会では、中世の天皇観の検討を通じて、日本の天皇・天皇制のあり方の根幹を再確認することができた。

[記事執筆：安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所所長)]

ジョーン・ピジョー教授の法政大学国際日本学研究所訪問

- 日 時：2008年6月23日(月) 10:00～12:00
- 場 所：法政大学国際日本学研究所

2008年6月23日(月)、南カリフォルニア大学教授で日本古代史研究のジョーン・ピジョー (Joan R. Piggott) 教授を法政大学国際日本学研究所にお迎えした。安孫子、クライナー、王、小口といった所員が、星野常務理事(国際日本学研究所センター長)や後藤文学部長も交えて、ピジョー教授と、アメリカにおける日本学・教育の現状、また今後の相互の研究・教育協力などについて、2時間以上にわたって、和やかかつ有意義に意見交換を行った。

[記事執筆：安孫子 信 (法政大学国際日本学研究所所長)]



後列左より安孫子所長、ヨーゼフ・クライナー教授、星野センター長、小口教授
前列左より後藤教授、ジョーン・ピジョー教授、王教授

2008年度 国際日本学 研究者一覧

2008年度 法政大学国際日本学研究センター

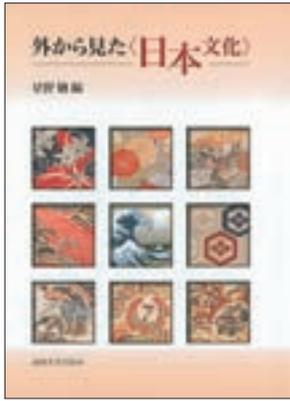
役職名	運営委員	氏名	主な所属等
センター長・事務室長	○	星野 勉	法政大学国際日本学研究センター担当常務理事，同文学部教授
副センター長	○	安孫子 信	法政大学国際日本学研究所所長，同文学部教授
兼担所員	○	王 敏	法政大学国際日本学研究所教授
兼担所員	○	西野 春雄	野上記念法政大学能楽研究所所長，同文学部教授
兼担所員	○	屋嘉 宗彦	法政大学沖縄文化研究所所長
兼担所員	○	山中 玲子	野上記念法政大学能楽研究所専任所員，同教授
兼担所員	○	吉成 直樹	法政大学沖縄文化研究所専任所員，同教授
兼担所員	○	杉長 敬治	法政大学企画・戦略本部特任教授

2008年度 法政大学国際日本学研究所

役職名	運営委員	氏名	主な所属等
所長	○	安孫子 信	法政大学国際日本学研究センター副センター長，同文学部教授
専任所員	○	王 敏	法政大学国際日本学研究所教授
兼担所員	○	市村 弘正	法政大学法学部教授
兼担所員	○	星野 勉	法政大学国際日本学研究センター担当常務理事， 同国際日本学研究センター長・事務室長，同文学部教授
兼担所員	○	勝又 浩	法政大学文学部教授
兼担所員	○	安孫子 信	法政大学国際日本学研究センター副センター長，同文学部教授
兼担所員	○	澤登 寛聡	法政大学文学部教授
兼担所員	○	スティーヴン・G・ネルソン	法政大学文学部教授
兼担所員	○	小口 雅史	法政大学文学部教授
兼担所員	○	間宮 厚司	法政大学文学部教授
兼担所員	○	相良 匡俊	法政大学社会学部教授
兼担所員	○	田中 優子	法政大学社会学部教授
兼担所員	○	田嶋 淳子	法政大学社会学部教授
兼担所員	○	曾 士才	法政大学国際文化学部教授
兼担所員	○	川村 湊	法政大学国際文化学部教授
兼担所員	○	高柳 俊男	法政大学国際文化学部教授
兼担所員	○	竹内 晶子	法政大学国際文化学部准教授
兼担所員	○	小林 ふみ子	法政大学キャリアデザイン学部准教授
兼担所員	○	横山 泰子	法政大学工学部教授
兼担所員	○	ヨーゼフ・クライナー	法政大学企画・戦略本部特任教授
客員所員		ジョセフ・A・キブルツ	フランス国立科学研究センター教授
客員所員		ローザ・カーロリ	ヴェネツィア大学東アジア研究所副教授
客員所員		桑山 敬己	北海道大学大学院文学研究科教授
客員所員		島田 信吾	デュッセルドルフ大学東アジア研究所教授
客員所員		高 増杰	法政大学国際日本学インスティテュート専任教授
客員所員		崔 世廣	中国社会科学院日本研究所教授
客員所員		福 寛美	法政大学沖縄文化研究所国内研究員

既刊案内

(本の購入に関する問い合わせ等は各出版社をお願いします)



第1章 『菊と刀』にみる「日本文化」
 ルース・ベネディクトの視点……………星野 勉

第2章 150年前に日本に来たフランス人……………相良 匡俊

第3章 モーツァルトと日本
 「魔笛」における「日本の狩衣」……………ヨーゼフ・クライナー

第4章 日本の妖怪とアジアの妖怪……………横山 泰子

第5章 東アジア文化の交差点としての日本文化……………川村 湊

第6章 現代中国における一つの日本観……………王 敏

第7章 欧米人の能楽発見……………西野 春雄

第8章 二人のノーベル賞作家
 川端康成と大江健三郎……………勝又 浩

定価 (本体2,900円+税)
 法政大学出版局 刊
 TEL. 03-5214-5540



はじめに……………星野 勉

日本学とは何か……………ジョセフ・キブルツ

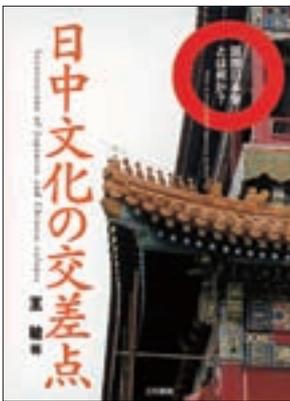
I 日本研究、「内」と「外」からのまなざし
 知識の生産、内発的vs外発的……………ハルミ・ベフ (翻訳: 木島 泰三)
 境界を越えて——文化人類学的日本研究の場合——……………桑山 敬己 (翻訳: 千田 啓之)
 人類学者たちとその地域——ヨーロッパ/日本のアプローチに関する諸考察——……………ジョイ・ヘンドリー (翻訳: 木島 泰三)
 「古き佳きヨーロッパ」像の呪縛……………シュテフィ・リヒター (翻訳: 鈴木 裕輔)
 ——日本学・地域研究の知的生産とその脱オリエンタリズム化の困難——
 文化比較と翻訳——文化社会学的考察——……………島田 信吾 (翻訳: 大橋 基)
 友日からの日本研究へ……………崔 古城

II 中国文化の領分と日本文化の領分——ヨーロッパの観点から——……………ウィリー・ヴァンドゥワラ (翻訳: 松井 久)

III 日本文化、「内」と「外」からのまなざし
 ヨーロッパと日本に於ける空間と時間の知覚——文化相対主義の弁護——……………ジョセフ・キブルツ (翻訳: 鈴木裕輔)
 日本思想史のあり方を考える——丸山眞男論を通じて——……………アニック・ホリウチ
 ヨーロッパの博物館・美術館保管の日本コレクションと日本研究の展開……………ヨーゼフ・クライナー
 真の異文化理解は可能か——教室のイメージを例として——……………相良 匡俊
 伸びゆく日本の文化力——フランスにおけるマンガの場合——……………ジャン=マリ・ブイス (翻訳: 山梨 牧子)

IV 日本文化をひらく
 国民国家をめぐる民族学と民俗学——柳田国男からの展開——……………樺山 紘一
 言葉から見える江戸時代の多様な人々……………田中 優子
 一揆・祭礼の集合心性と秩序——百姓一揆絵巻『ゆめのうきはし』を素材にして——……………澤登 寛聡
 伝統と同時代性——能楽研究の国際化は可能か——……………山中 玲子
 和辻哲郎の哲学のポテンシャル……………星野 勉
 趣味の国民性をどう扱うか——丸亀周造の日本、バルクソンのフランス——……………安孫子 信
 おわりに「国際日本学」とは何か——「翻訳」から見えてくるものを手がかりに——……………星野 勉

定価 (本体3,500円+税)
 三和書籍 刊
 TEL. 03-5395-4630



総論 比較を伴った文化交流——戦前の「日本教習」と日本留学を中心に——……………王 敏

I 日中比較文化篇
 一九六〇年代の日中文化交流をめぐる一考察——『天平の甕』の翻訳事情を中心に——……………孫 軍悦
 日中広告文化の違い——最近の広告摩擦を機に考える——……………福田 敏彦
 日中齟齬の文化学的研究——時間と空間の認知傾向を中心に——……………李 国棟
 日中両国近代実業家の儒学観——渋沢栄一と張春の例を中心に——……………于 臣
 日本人の伝統倫理観と武士道……………谷中 信一
 文化象徴による接近——四君子の蘭と十二支の亥——……………濱田 陽
 日本文化をどう理解すべきか——異文化の視点によるアプローチ——……………楊 曉文

II 日中比較コミュニケーション篇
 戦後六〇年の日本人の中国観……………敵 紹壘
 日中の異文化コミュニケーションと
 相互理解における阻隔……………劉 金才・尚 彬 (翻訳: 坂部 晶子)
 日中相互認識とナショナリズム……………王 新生
 東アジアにおける対話の土台づくり……………羅 紅光
 日中のコミュニケーション方略に関する一考察……………高橋 優子
 ——謝罪の発話行為における「談話の収束方法」と「話者交替数」に着目して——
 戦前日中政治衝突と文化摩擦の一幕——日中戦争開始当日の日中記者大論戦考察——……………徐 氷
 グローバル化社会における日本語教育の目標及びそのモデルの立体的構築……………王 秀文
 おわりに 日中比較文化研究に関する幾つかの視点……………王 敏

定価 (本体3,500円+税)
 三和書籍 刊
 TEL. 03-5395-4630

法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究センター

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3

法政大学市ヶ谷キャンパス九段校舎別館1階

TEL. 03-3264-9682 FAX. 03-3264-9884

E-mail nihon@hosei.ac.jp

URL: <http://aterui.i.hosei.ac.jp/>

